地名研究会報　第17号
A-1:かごしまちめいA 7ル 48/40
昭和62年　9月6日
鹿児島地名研究会

Ⅰ・第17回例会　　昭和62年6月7日（日）
（出会者）　江之口汎生・江平望・小川亥三郎・桐野利彦・中村明蔵・西薗一俊・花園正志・平田信芳
本田親虎・山口静也・青柳俊二　（11名）
Ⅱ・問題提起　『難解な地名』　老神・大小路・芭蕉　［発表者＝江之口汎生］

江之口：　日頃、気になっている地名が沢山あります。今まで、いろいろ自分なりに考えていたんですが、なかなか判らなくて。本来なら「こういうことが判りました」という結果を発表する場であろうと思うんですけれども、まぁ、判らないなりに問いかけをして皆さんから情報なり、アドバイスを頂けたらと考えましたので、判らないままに発表したいと思います。今日発表のメインは最後の方に、難解な地名ということで、老神・大小路・芭蕉の三つをあげてありますが、その前に、若干寄り道をして別の方から始めたいと思います。

【祭礼に因む地名】

『社寺の祭礼に因む地名』というレジメがあると思います。これは前々回の時に、松田先生の話の中に「桑田」が出ました。地名の中には桑田とか二月田とか九日田とか、まぁ、こういうような地名があるわけです。九日田がオクンチの田圃というのは判りますし、彼岸田というのも、彼岸の行事に因む田圃であろう、というくらいのことは容易に想像できます。けれども、例えば二月田とは一体なんだろうか、となると正確なことはなかなか判らないわけです。そう云ったのを、神社関係の資料なんかをもとにして、その内容を明らかにしようと思ったもんですから、その前段階としまして『角川地名』からそういう関係の小字地名をリストアップしてみたわけです。

【二月田】

二月田。二月というのは春ですから、すぐ打植祭が思い浮びます。県立図書館の『神社明細帳』を見ますとこんなことが書いてあります。「二月五日打植祭と号し、浜下りありたる故なれども近年正月三日に云々」、そのあとに「二月、彼岸田ありし、祭ありたる故」とあります。従いまして二月田という地名の中には打植祭の要素もあるだろうし、それから、彼岸田の要素も考えられます。彼岸は当時はもちろん旧暦ですから、二月と八月の二回ですかね。そういうようなことで焦点がどうもぼやけてはっきりしたことが分らない。

【三月田・四月田】

それから三月田というのもあります。三月は、初午祭の要素もありますけれど、三月三日の雛祭もあります。同じ『明細帳』には「三月三日星祭と号し星田、或ひは三月田云々」。他にもいろいろ探して見ますと、例えば「四月卯祭と号し辰の日祭あり。祭田、上福元の内桜田一町」と書いてあります。つまり「桜田」という田圃があったというわけです。普通我われが「サクラ」という場合は、いわゆる谷間の狭い石塊の多いというような、そういうようなことが一般的で、桜田が祭の田圃である可能性については、どの辞書にも書いてありません。

そういったことも含めて、祭礼の内容を全般的に解明してみようと云うことで、まずその第一段階として、ピックアップしたのがこの資料です。もちろん見落しもありますし、この他にもこれに類する地名があると思うんですけれども、一応出したということです。

【クリス・クルス】

前回都合が悪く欠席しましたが、その時に「クルス」の地名が話題になったということを耳にしましたので、参考に供したいと思って、ここに出しました。もう何年も前から、全国各地の地名に関する文献を集めております。本県の地名を考えて行く上で、参考になるであろうという文献は一応揃えてあります。もちろん完全ではありませんが。

今までは、そういったのを集めるだけで、どの文献がどの箱に入っているのか判らなかったのですけども、それではいけないということで、少し整理しまし。それで前回の例会で、たまたま「クリス」が話題なったと聞いたものですから、ここに持って来ました。『クリス地名について』『クリスの名義をめって』『ダグリ地蔵』の三点です。文献が手元にあったので持参しただけのことで、内容は見て頂ければ判る思います。

『クリス地名について』というのは『長崎大学人文科学研究報告Ⅱ』に出ているもので、昭和27年の文献です。内容は、と云いますと第一に、クリス・クルスは栗の木の密生した場所というような解釈をしております。それから二番目に、クリス・クルスとは栗の巣、すなわち栗の実のイガを云うと説明。第三に、クリス・クルスとは園操とも呼ばれた、古代の未開・間民族に関係する地名である、ということが書かれています。しかし「ここに紹介した解釈はいずれ無理があるように思われる。というのは地名の蒐集・その分布の考察が不充分であり、また地名の場所の地理的考察もなされていないし、これに近似する類例の地名との関連も考察されていない」という素朴な、地名研究の上ではきわめて重要な疑問を投げかけております。そこには25例のクリスを挙げてありますが、これには鹿児島のは一例も出ておりません。それから「グリ」は岩のこと、石のこと、というような解釈がされております。また山中河谷の地名としてはクリダ、クリサワ、ヘグリ、クリノエ、タグ、サイクリなどの類例を挙げております。この中のタグリというのは、あとでちょっと触れたいと思います。それからクリスの「ス」の意味を集落・場所というようなことで書いているようです。それから飛躍させてクロス、クルマというようなことなどを取りあげてありますが、読んで頂ければ判ると思います。

その次は、私が調べたクルスの鹿児島県における分布です。計44の小字があります。この中には加世田市武田の字のように、本来はひとつであったものが、上とか中とか下というように分離した例で、もともとは一つと数えるべきものも、まぁ、ダブっておりまけれど一応入れてあります。

「クリス」の表記もいろいろですけれども、例えばレジメの左の方に「久留須原」があります。入来・浦之名の方に。本田先生の所だと思いますが、そういうような表記。それから「黒須」。ブラックの黒を使っているような、まぁ、いろいろです。あるいは片仮名で書いたようなものも出ております。これらの地名は見落しがあるかも知れません。

また俗称は調査が非常にむつかしいので未集計です。文献対比はもちろんしておりません。それとですね、最初にお断わりしておかなければならないのですけれども、姶良郡に栗野町があります。『和名抄』を見ますと同じ表記に「久留須乃」のルビが振ってあります。山城国愛宕郡です。一方、同国宇治郡の小栗には「乎久留須」のルビがあります。こういうのは恐らく『風土記』の編纂の時に佳字を使えとか、二字にせよというような通達が出されておりますので、そういうような為政者の力で〃強引〃に「変化させられた」部分もあると思います。ダメ押しのような形で『延喜式』編纂の時にも同じような通達が出ております。地名というのは不変ではなくて、常に変化を繰り返しておりますので、注意しなければいけないと思います。仮に栗野を久留須乃、小栗を乎久留須と呼んでいた例がかって本県にあったとしても、まずリストアップは不可能ということです。

先程の久留須原は、これはちょっと場所を押えてないので、あとで教えていただきたいのですが『旧蹟調帳』の中に「久留巣ヶ原」が出ますので、恐らく同じ場所ではないかと思います。

それから、ちょっと文献に入って行きたいと思います。ここに抜けているのがあります。鹿屋市の秋川に栗須があります。唐鎌先生が『シラス地域研究・3』に書かれた中に入っております。栗須川もあります。クルス、それからクルッスと二通りのルビが振ってあります。で、それから右側のクルソン。下の方です。鹿児島の宇宿には黒園もありますが。『内之浦町誌』の中にも同じ地名があって、『高山町史』にも黒園嶽が出ますが、瓊々杵尊が遊幸された伝説が残っているようです。また、御存知と思いますが川内川の上流、えびの市には狗留孫渓谷があります。何年か前に南日本新聞の『ふるさと流域紀行』にも出ていたと思います。

文献をちょっと見てみますと、まぁ、もちろん完全じゃないんですが、『和名抄』に出ますから全国的には古いわけです。本県における出自ですが、私が今把握している限りでは川内市の「クルス」が一番古いようです。違っていたら済みません。「牟木浦栗栖山一所」と出てきます。寛喜三年、1231年です。これが鹿児島県では早い頃の地名。それから久留須門というのは文暦二年、これは1235年で、国分の重久名の文中に出て来ます。『角川地名』の項目では久留諏平というのが一ヶ所あがっています。田代町域になるようで、応永五年、1398年です。本来は、こういうのを整理して資料として出さなければいけないと思いましたけれど、あとで機会がありましたら、内容をクルスに絞って発表したいと思います。まぁ、そのような状態です。

それから、さき程言い忘れましたが、出自となっている川内市の「牟木浦栗栖山」は成枝名内の地名です。財部の延時文書の中に出て来る地名で、現在の隈之城の、「牟木浦」ですから、恐らく場所的には狭い、どんづまりのような所じゃないかと思います。とにかく隈之城村近であることははっきりしているようです。

その次に、これですね、新聞の。出典を書いてありませんが、『地名語源辞典』です。昭和43年発行の。あの一当然といえば当然ですが、キリスト教との関係が云々されておりますが、資料の右側の上の方、ちょっと下った所に「久留主塚」というのが項目としてあがっております。それから、真ン中辺のちょっと下った所ですが、「出牛」というのはデウスの音転ではないか、と云うようなことが書かれております。しかし、こういうのはむしろ例外で、やはり、その古い地名ですから、まぁ一般的な見方としましては、鹿児島県で、そういうのがあったというのは、ちょっと考えられないんじゃないかな、と私は思います。

【ダグリ】

それから、その右側の新聞記事の「タグリ地蔵」について。これは昭和56年の『神戸新聞』です。ご存知のように、志布志にダグリ崎があるもんですから、あれが以前から気になって、それでちょっと出したんです。ここではタグルというのはセキ、いわゆる風邪の咳(せき)の方言だ、ということが書いてあります。それでその咳と関所のセキをひっ掛けた地名だと云うような解釈がされているようです。本県の場合は、例えば志布志の社会教育課にちょっと問い合せましたら、関所では他国の人夫を入れないため、ここで「荷駄繰り」をして地元の人夫と交替した、というような返事がかえって来ました。「本当かいな」と、ちょっと私には信じられないんです。まぁ、関所関係の文書を当っても、例えば行商人はほとんどフリーパスで通ったような文書もありまして、そげん厳しかったろかいねと、その説には疑問を持ってるわけです。それじゃ何かと云うことですけれども、その一関所の関。いわゆる方言で見ますと、本県では全然そういうような痕跡――咳をタグリ、あるいはダグリと云ったというようなのは探せませんが、『宮崎県方言辞典』では西臼杵郡に分布がある、これがいわゆるタグリの一番近い方言分布じゃないかと思います。それから、そこにちょっとうすく書き込んでありますが、これは本県における「ダグリ類似地名」の分布です。タグイ崎が東町の獅子島。ダグリ崎は志布志の夏井ですね。それからタクリ岩が鹿児島市の皆与志。タグイヶ坂が串木野の麓。その昔、串木野城が落城する時、家来が敵に槍で突かれたが、ヒルまず槍をたぐり寄せ相打ちになった。以来タグイヶ坂云々の伝説が『串木野郷土誌』に出ております。まぁ、ダグリもはっきりこうだと結論は出ませんが、こういう文献があるということで、ここに持って来たわけです。

【クリス・クルス】

その次に『クリスの名義をめぐって』というのがあります。五枚ほどのものが。これは比較的新らしい文献で、出典は『くちくまの（口熊野）・48号』

本田：　それは和歌山県？

江之口：　はい、和歌山県です。昭和56年５月の発行になります。紀南文化財研究会の機関誌です。これがまとまった文献としては一番新らしいだけありまして、いろいろ網羅していると申しますか、上から眺めているような感じで、これは、読んで頂ければ判ると思います。ただ、その二枚目の所にこんな記述がありますので、ちょっとお話ししたいと思います。11ページの上の方の最後の行、「其地形外に向ひて出て半円の如く水外を流るゝを邦言これを丸栖といひ栗栖といふ」と。それから、その反対の地形を「内に向って曲り入て弓の如くなるを隈とも

和田ともいふ」。そういうような記述があります。これは要するに、例えば川内の中心街。川内川を見ますと、ちょっと地形を御存知ない方もいらっしゃるかとも思いますが、こちらの北側が上流で、川は南方へ真っすぐに流れ、自衛体の下、清水ヶ丘の辺で大きく西西北方向へ半円の如く、水は湾曲して流れます。この湾曲した内側――ということは水は外側を流れることになりますが、こういう地形をクルスだ、といっているわけです。まぁ、この説に従えばです。その反対、対岸の地形を、――ということは、入江のような地形になるわけで、当然水流は内側をエグルように流れるわけですが、これを隈、あるいは和田だ、としています。川内の地名由来の一説にも似たような記述があります。『地理纂考』などを見ますと「川北、国府の方を川内(かわうち)と云ひその外を川外と云う」。だから川内(せんだい)の名称が出来たんだ、と説明してあります。

最後の16ページに、「クルス」の全国分布ということで32例があがっています。鹿児島県では川辺と川内の二例だけのようです。こういったのを、いろいろ論述した上で、17ページの下の方ですが「その解釈の多様から起る疑問や問題は、たちまち民族、歴史、地理、言語、国語などの隣接諸学につながって、浅学での深い立入りは至難である」として、結論を避けております。それで、これは発表されたのが昭和56年でしたから、それから日が経っていますので、その後の成果はいけんじゃろかいと思いまして筆者に手紙を書いたんですけれども、あんまりせっぱ詰まっていたからでしょうか、まだ返事が届いておりません。

それから、話が飛んで申しわけないんですが、参考のために申しますと、クリスの小字は隣の宮崎県の場合6例。小林とか、野尻とかに6例あります。それからすると鹿児島の44例というのは、ちょっと多いんじゃないかと思います。（＊最終集計では60例を越す）もっとも、単純に数量だけではいけないんで、やっぱりパーセントで判断すべきでしょが。

それから、その他にも、興味のある方は御存知だと思いますが、吉田茂樹の『地名の由来』の中にクルスについての記述があります。分量は三ページほどですけれども。私の知っているクルスの文献はそれだけです。

それから、そこには書いてありませんが『姓氏家系大事典』で名前の方からちょっと当ったんですけど、いわゆる古代・中世の荘園から起った地名、あるいは『和名抄』の郷名から起った地名、地名じゃなくて人名ですね。姓があって、別に目新らしいような事実は出ていないようでした。

【紫美・紫尾】

次に『出水市の信仰地名』という偉そうな表題のレジメがありますが、これは、もう三年くらい前の資料で、ちょっとアテにはならない部分もありますけども、一応手元にありましたので、これが正しいというのではなくて、ひとつの参考資料として出したわけです。特別に話すようなこともないわけですけど、前回、たしか紫尾というのを『麑藩名勝考』の読会で通ったと思うんですが、ちょっと、二・三気になるところがありますので、一緒に見てみたいと思います。

レジメの4番目に、出自としまして『三代実録』の記事をあげてあります。貞観10年の方は、日付が三月二十九日になっていますが、何気なく書いたんですけど、これは『名勝図会』からとりました。他の文献を見ますと、10年の場合はすべて三月八日になっていまして、『図会』ばっかい、ないごて三月二十九日じゃったろかいと、これはまぁ、ちょっと疑問があります。この8年と10年の、二度にわたる授位というのも非常に疑問がありまして、今いろいろ調べているんですけど、これは地名とは直接関係ないことですから、ちょっとはずします。ただ、恐らくこの記事はどちらかが間違いと云いますか、何かこう、このまま信ずるのは危険なような気がします。

それから五番目に由来というのを六ッほど挙げておりますが、紫雲説、紫の紐説、紫引説、シブ・シビなどですが、『麑藩名勝考』は死人山――紫尾山の周辺に結構、古石塔類が多いんですが、紫尾山全体がいわゆる「墓場」という考え方で、死人山という説です。一方「渓尾(しぶ)山」というのが『地理纂考』。この字をシビと読ませています。それでどんなことが書いてあるかと云いますと、「双方ヨリ峠ニ登ルコト共ニ二里半ナリ、深渓ニ下リ絶頂ニ登ルコト数回ナリ。山中大樹空ヲ覆ヒ終日日影ヲ見ル事ナシ」だと。紫尾山はいかにも山ン中だというようなことが書いてあって、だから渓尾だとは云ってないんですが、そういうのも、一つの説として見ることが出来るんじゃないかと思います。

それから『太宰府管内誌』に「紫美は志毘と訓ムべし」「シビと云は長くつゞける山なり、此山ノ神をいふなるべしと云へりき」というようなことが書いてあります。太宰府管内誌は天保10年(1839)頃に書かれたもののようですが、内容が目茶苦茶ですから、あんまりアテにはできないんですが。

ここでレジュメ【Ⅵ】由来の「⑥」に注目していただきたいんですが、あるいはこの前、そんな話も出たと思いますが、紫尾の読み方ですね。貞観8年の出自文書ではあくまでも「紫美」なんですね。当り前と云えば当り前なんですけど。ところが、その当り前のことが全然考えられていないわけです。いろんな郷土誌を見ても、全部「シビ」になっています。『和名抄』を当って見ますと――とにかく新らしい年代の読み方とか漢字というのは、あまりアテになりませんので、出来るだけ古く遡るんですが、『和名抄』では「美」の表記は、頭に持ってくる場合（美△）が45例中6例、二字漢字（△美）の場合でも56例中10例にルビがありますけれど、いずれの場合も訓は「ミ」になっております。後はルビがありません。これは、もちろん当然と云えば当然ですが、全部「ミ」で、他にも三字の地名があるかも知れませんが、『和名抄』の場合は、ほとんどが二字で統一されておりますから、全て「美の訓はミ」と考えていいと思います。こんなのを一々説明するまでもなくて、要するに国語の問題なんですね。そもそもカナの「み」は「美」の草書体なんですね。

因みに当時「ビ」はどのような字を使ったかと云いますと、あくまで受売りですが、甲類が鼻・婢・妣・寐など、乙類は備・眉・肥・媚などが使われていたようです。ですから紫美は明らかにシミ。従って濁音の「シビ」で解釈しても、全然問題にならないと思います。そのようなことを、いろいろな文献で調べてみたんですが、『大日本地名辞書』を書いた人、吉田東伍という人は、ホントに偉いと思います。紫尾に「シミ」のルビがあるのは、この『地名辞書』と『神祇志料』だけなんですね。地名辞書は明治の頃の本ですけれども、実に文献に忠実なんですね。その上で「今按ずるにシミとはシブと同音にて、鉱泉より出し名也」と結論しています。まさにこれじゃないかと思います。私も以前、何年か前に紫尾の地名由来について、いろいろ書いたことがありまして、渋とか絞むとか書きましたが、その時は『地名辞書』なんか手元にあっても見ることもなかったのですが、今考えてみれば、やっぱりこれを書いた人は偉いんだなあと、ただただ感心するだけです。それでシミというのはさて何だろうかとなりますが「渋」というのもあるかも知れませんが、私はひょっとしたら「滲る」、下から泌み入る、そのような意味があるんじゃないかとも考えています。

因みに『麑藩名勝考』が手元にないので、ちょっと確認は出来ませんが、紫尾神社というのは紫尾部落にひとつ、これは今の紫尾温泉の所ですが紫尾に一社、もう一つは柏原にあります。宮之城の町から行きますと、紫尾のずっと手前になります。鶴田町柏原、ここは御存知だと思いますが、郡元とか政所、市場などの地名が残っており、郡衙の跡ではないか、あるいは院倉の跡じゃないかともいわれ、古代祁答院地方の中心地と考えられている所です。そこに一社あります。これは「古紫尾神社」です。古紫尾神社。私はこっちの方こそ注目しなければいけないと思うんですが、一般にはあまり注目されておりません。国柱の『麑藩名勝考』も、こっちの方を確かに詳しく書いてあります。『三代実録』の授位の記事はこっちの方だとか、十行くらい書いてあります。一方紫尾部落の紫尾神社は三行しか書いてありません。つまり、昔からこっちの方が歴史的には古かったわけですね。名称が「古紫尾」ですから当然でしょうけれども、あまり注目されていない。本田親盈の『神社撰集』（安永5年＝1776）なんかを見ますと、古紫尾神社の方だけで、紫尾部落の紫尾神社の方は記載がありません。いずれにしても周辺部に散在する紫尾神社は、御嶽信仰としての「里宮」の性格が強いんじゃないかと思っております。

【老神】

さて、いよいよ本題に移りたいと思います。『牛這祭由来』は、私が以前、作ったのがありましたので、ここに持ってきました。これは省略します。あとで読んで下さい。

要するに、なぜ私が「老神」に興味を持ったかと

申しますと、先生方も最初はそうだったと思うのですけども、身近にあるものに興味を持ちまして、家の近くに「生神神社」があって、四年に一度、二月の朔日に牛這祭あってしかし、神社の性格が良く判らないもんですから、調べて行くうちに興味が深まった、というわけです。牛這祭由来は、私が老神に興味を持った、そもそもの出発点です。

「老神」の意味については、何となく判ったような、判らないようなということで、すっきり、どうもしないわけです。それで、順序が逆になりますけれども、一番下の行に柳田国男の「笈神説」が書いてあります。こういう説に、成程なぁと思いながらも、ある部分では納得できない点もありますので今日、皆さんにお知恵を頂けたらと思いまして、提示するわけです。老神の全国的な分布というのは、ちょっと私が当った範囲では、どうも出て来ません。ただ、鹿児島の場合は、いろいろ、神社庁とか、各市町村の郷土史、また角川地名の『小字一覧』等もありますから、全部ピッグ・アップしました。

老神神社は熊本県の二例を入れまして、全部で18例あります。その祭神はと言いますと、天照大神、いわゆる伊勢神社の神様だというのがレジメのNo５までですね。それから猿田彦だというのが３例あります。８番の猿田彦というのは、これは私の所ですけれども、伝承はもちろん棟札類も残されておりませんし、祭神が猿田彦だとの根拠が今ちょっと、はっきりしないわけです。なんで祭神を猿田彦としたのか。ここでは『川内市史・上巻』の神社一覧から採ったのですけれども、どうも良く判りません。だから、これは「？」じゃないかと思います。10番と11番は、霧島神であるということ、霧島神と同体というようなことが、『球磨郡神社記』に書いてあります。10番は、大同２年創建とありますが「不詳」に直して下さい。その下の11番は大同年中とありますが「大同元年」に直して下さい。私のミスです。次の12番は王子大権現。これは熊野系の神様でしょうか。13番は鹿島神の父母神を祭祀するというようなことが『止上文書』などには書いてあります。また14番は火の神様だということになっております。しかし、最初に禰宜さんに問合せましたら、山の神さぁだと言っておられました。あとで、そこの照国神社横の神社庁の書類で見ますと、火の神になっております。本地は虚空蔵菩薩ということが『加治木町誌』に書いてあります。その下の方、鹿屋などにも幾つか神社がありますけれど、祭神も一定しておりませんし、創建年代もよく判りません。神社で一番古いのは、はっきり古いと判るのは14番で、文明18年以来の棟札が残されております。1486年のころで、これが記録上は古いようです。それから、私の所の８番は、延宝９年の棟札が近年まで残っていたことを、昭和12年の『樋脇村誌』が記録しております。もっとも、延宝９年が創建なのか、それとも再建なのかはちょっと判りません。その下ですけれども、『入来文書』の中に「大井神田」というのが出ます。これが即８番に結びつくという根拠は何もないのですけれど、あの辺で、オイカミ神社は楠元ぐらいしかないもんですから、大井神田は楠元の生神神社の「神田」ではないかと考えたのです。

その次に地名の分布を見てみますと、群馬県に一つ。ここは温泉があって有名ですから、ご存知かとも思いますが、利根郡利根村。それから、熊本県の湯前町に一つ、球磨郡ですね。それから、鹿屋市田崎、出水市武元に老神というのがあります。その他に、末吉町南之郷にこの地名があります。しかし末吉町の例は地名だけで、今はもう神社があったと言いますか、神様が居られたというような話は、全く聞くことが出来ませんでした。、要するに、それ程早くから忘れ去られてしまっている、あるいは、神社自体があまり大きくなかった、と云うことでしょうか。それから、老神原というのが栗野町にありまして、『町誌』を見ますと、「老神神社のあった場所」と書いてあります。それから「老神川」というのが、これは垂水ですが、『垂水録』に出ております。それから、七老神というのが荒尾市にあるということが、『肥後国誌』に出て来ますが、まだ現地を確認しておりません。その他に「老神池」が、10番の関係で『肥後国誌・補遺』に出ています。同じ人吉市には「老神馬場」というのもあるようです。これは『熊本県の地名』に出ております。鹿児島では『旧記雑録・後編４』の１５７ページ上段に『老神大明神』というのがありますが、その文書から見る限り、それがどこの神社であるか、ちょっと判りませんでした。

老神の地名由来ということで、いろいろ探してみましたら、『沼田根元記』に、神様同志が喧嘩をして、一方の神がもう一方の神に追われたから、神を追うと書いて「追神と申しならわし候」ということが書いてあります。これで興味があるのは、この赤城明神と日光権現が喧嘩をしたという伝承が、No６の姶良町の「黒島どんと老神どん」の伝承に共通があるのかなぁ、ということです。

次に赤城信仰、これは利根村に伝わる老神についての話をそのまま並べたんですけど、この中に千匹ムカデや片目の蛇、というのが出て来ますが、これは地名学、学とはちょっとあれですけれど、地名から見ますと、金属神と云いますか、そういうような性格、「金山彦」的な神様ということになってるわけです。谷川氏の本の中にも書いてあります。そうなるとNo３の加世田市の例ですが、老神蔵王権現の所に、これは『神社明細帳』の記事ですけども、赤字で「金山神社」と加筆してあります。その辺が非常に興味、いや共通性があるかなぁ、と思ったりするのです。

それから、次は「於箇美=ｵｶﾐ」説。いわゆる水神説ですね。これは、さっきの『牛這祭の由来』の中にも、ちらっと書いたんですが、いわゆるここの場所がですね、神社のある場所が「フッドモ」という所で、フッドモというのは恐らく「古塘」だろうと思うんです。古塘という所は土手がありまして、沼や池がある所で、実際に地元でも、そのような言い伝えがあることが一点。それから、出水市の場合でも、現在も安政年間の風の面、日の面、雨の面の三つの面が残っておりまして、戦前まで雨乞いをしたという伝承があります。あるいは長雨を止めた、面をつかって止めた、と云うような話を聞いたものですから、そこから水神じゃなかろうか。水神ならば於箇美ではなかろうか、というふうに連想したんですが、結果的にはこの説は検討を要するようです。つまり、於箇美と老神は甲類と乙類で全然違う、言語学的に全然違うようです。

それじゃ、柳田国男の「笈神説」なのかなぁということを思っているわけですけれども、それも、必ずしも百パーセント納得いくような痕跡は、鹿児島県では探すことが出来ません。それで右側の上の欄ですけれども、こういうようなのは各地で行われたようなことが、柳田国男の本には書いてあります。

しかし、例えばですね、右側三行目に、宮之城の『湯田八幡縁起』というのがありますが、それによりますと「寿永の昔、八幡大菩薩と鏡を笈の中に納め、縄を掛けて持って来た」というわけです。これが今の湯田八幡の由来ということになっているわけです。この寿永の昔というのは『祁答院記』によりますと、寿永２年(1182)になっております。私が納得できない点は、今でも、あそこは「湯田八幡」であって、老神とは云わんわけです。八幡神を持って来たから、やっぱり今でも八幡神社なんですね。

もう一つ。牧園町の安楽温泉の縁起が『三国名勝図会』にあります。これは、笈神の説明の中で柳田国男も引いておりますけれども、熊野三社権現を笈に入れて、負い来たのが由来だというわけです。この場合でも、あくまでも熊野三社権現であって、老神とか笈神などとは呼ばないんです。ですから、このような話を聞きますと、修験者とか、山伏、普通とはちょっと違う人たちが、神様を笈に入れて持ち歩き、あっちこっちに祭祀したというのは判るわけですけれども、だから笈神とか負神ということは理屈としては理解出来ますけれど、実例としては残念ながら確認が出来ません。結論・結果としての「老神」はレジメメの通り、18例ありますが。

それと、もう一つ、「老男説」というのがあります。これは、国学院大学の乙益先生が『えとのす・31号』に、今年の二月頃出たんですが、書かれております。この説には疑問があるんじゃないかなと思います。霧島神と云いますのは、さっきの分布で申しますと、No10番と11番ですね、球磨郡人吉市と岡原村の二例ですね、この二例を根拠に、そういうことを書かれているわけですが、ご存知のように霧島神というのは各地に沢山ありますし、「老神」それ自体も、それ程古い神社のようには、どうしても思えないわけです。乙益先生の説を簡単に云いいますと、「霧島神は国造本紀に出る諸県の君の祖神である老男を祭祀したもので、老神はこの老男の転訛である」との主張です。しかし、この霧島神の創立年代、いわゆる人吉の老神神社の創建年代というのははっきりしません。11番の大炊神神社の創建が、大同元年になっておりますけれども、棟札などの正確な記録があるわけじゃありません。根拠は『球磨郡神社記』の記事です。神社記の記録ですから「伝え

て云ふ」というような書き方をしております。こういう記録や伝承は、それ程正確なものではないんじゃないかな、と思っております。それともう一つ。その大同元年という年号が、仮に事実であったにしても、これはあくまでも霧島神社の創建、始まりと云うことであって「老神」そのものの始まりではないんじゃないかと思っています。それで、乙益先生にもこの資料を送って、あらためてお考えなどを聞こうかなと思っています。そういうことで柳田説かな、と思いながらも、どうも肝心の点で納得出来なくて、ここに提示しました。後で先生方のお考えをお聞かせ頂けたらと思います。

【大小路】

次に大小路に移りたいと思います。川内市に大小路という町名があります。地元では「ウシュッ」と言います。寛永六年(1629)が出自のようです。分布を見てみますと、石岡市にも大小路があります。訓はオオコウジです。それから姶良町東餅田、ちょっとこれは読み方が判りません。加治木町にも通称としての大小路、オオコウジですかオオショウジですか、これは郷土誌に載っていました。読み方は判りません。郷土館にも行ったのですけれども、私が尋ねてから、はじめて郷土誌を引っぱり出すような状態で、結局、現在もどの辺を言うのか確認出来ておりません。それから宮崎県佐土原町。これは『角川地名』から引っぱったのですが、寛文五年(1665)です。川内よりは40年くらい後ですね。同じ宮崎県の南郷村。それから秋田城。この二例は共にオオコウジの読みです。加世田市津貫は読み不明。それから宮崎県平郡庄。これはちょっと勘違いでした。消して下さい。荘園資料に「押小路姫宮御領」とあったもんですから挙げましたが確認出来ません。はっきりと判りませんので、消して下さい。（＊後註＝押小路、広小路も同類地名であろう）他に宇部市、下松市、因島市、堺市。大阪の堺市には私鉄の駅、大小路という駅もあるようです。（＊後註＝現在までのところ大阪堺市の例が最古で応永13年＝1406の文書に「おう小路」と出る）

それで、地元では大小路の地名由来としてよく云われるんですが、そこに書いてありますように、付近には薩摩の国府・国分寺があって、「大きな路やら小さな道やらが碁盤の目のように縦横に走っていたから」大小路の名称が生れたんだと云われております。しかし、これはどう考えてもおかしい。大路はあくまで大路だし、小路は小路で、それが大小路に転訛する可能性は全然ないんじゃないかと思って従来説には以前から強い疑問を抱いております。ただし「小路」ですから、道路に関する地名であろうということは、何となく判るような気がします。

話が飛びますが、これ以外に鹿児島市の方にもかって大小路があったようです。現在もこの地名が生きているかは判りませんが、前後の文脈からある程度場所の特定が可能ではないかと思いますので、後で先生方にその場所を教えて頂きたいのです。『神社撰集』の記事ですが「二月・十月十七日ハ宇治瀬大明神祀場立内ノ祭ト号シテ往古ハ広小路ノ浜ニテ云々……大小路前ノ浜ヘ住連ヲ引キ幣足ヲ立テ祈念有也、然ルニ近年大小路前ノ浜ニ波戸出来場所無ニ今鶴江崎ニテ祀場立ノ次第之有也……」と。ここに大小路が出て来ます。どうも海岸べりのようです。

同じ場所か全然別なのかは判りませんが、『地誌備考』にも「孝行屋敷と云も今に有と聞、築地には愛染明王立せ給ふ。普賢院之格護とかや、夫より又立帰り、大小路通り滑川札之辻、新橋口、琉球仮屋、庄内かりや、種子仮屋、櫨の木馬場は広したり……」とあり、ここにも大小路が出て来ます。それをちょっと確認したいのですけれど、後で教えて頂きたいと思います。　それじゃー、その大小路とは一体何だろうかとな思っているんですが、これはどうも、これじゃないかなという気がします。つまり小路という一つの小さな道がありまして、これを、まぁ、「シュッ」と呼んだのか判りませんけれど、後にこの小路が拡張されて「大きな小路」になるわけです。大きな小路。これから来ているのじゃないかと思います。小路が大きくなったんだから「大路」でいいんじゃないか、というような気もしますけれど、地名というのは、長くそこに人が住んで、生活が営まれている間は、古い地名を棄て去ることが出来ない。長く慣れ親しんだ地名は、周囲の状況が変化した後でも、簡単には消滅しません。小路が大きくして拡幅されても、大路と云う新しい地名ではなく、旧名をそのまま採用して大小路。大小路はそういうふうに解釈出来るんじゃないかと思います。また、いわゆる、出村とか今村とか呼ばれる地名があ

ります。このように、新らしく“都市計画”にもとづいて村落が形成される場合は、最初から大路でもいいのかも知れませんが、そこに人が住んで供用されている道路を拡幅した場合は、以前からの地名を簡単には放棄出来ないもんですから「大・小路」となるんだと思います。別に、広小路というのもありますが、これなんかも、やっぱり同じような意味があるんじゃないかと思います。少なくとも従来から云われているように「大路、小路から大小路」というようなことはないんじゃないか、まぁ、そういうことです。

【芭蕉】

それから、次の「芭蕉」についてです。芭蕉は出水にこの小字がありまして、出水地名研究会で話題になったものですから、いつの間にか興味を持ったわけです。それで、出水地名研究会ではどういうことが話題になったかと申しますと、芭蕉字の場所は肥後境で江戸時代には辺路番所があって、「芭蕉は番所の転訛じゃないか」、ということでした。それで、ちょっと自分でも調べてみたわけです。

「芭蕉」の地名分布を見ますと、県内の各地にありまして、番所があったような所だけでは、必らずしもないようです。芭蕉とか、芭蕉田、芭蕉下、芭蕉ヶ迫とか、いろいろあるようです。レジメの「芭蕉地名分布」の◆印、ちょっと判りにくいですが、◆に「芭蕉田」「場集田」があります。これは同一地の地名で、現在の小字や『霧島町郷土誌』では場集田、『東襲山村史』や『神社誌』では芭蕉田となっています。ですから、これも芭蕉分布の内に入れてよいと思います。それ以外に離島にですね、有名な芭蕉布というのがありますが、それとの関係だと思われるんですが、そこに挙げた以外に10ヶ所ほど「芭蕉」の小字が抜けております。これは島が中心です。現地を尋ねまして、「ないごてバショち云とな」と聞けば、大概「バショが植えちょったでお」と、こう言やっわけです。それで、私は、少なくとも番所――出水地名研究会で話題になったように、「番所があったから」よりは、「芭蕉が生えていたから」の方が、余ほど真実味を帯びていると思うんです。

ただ一つですね。気になることがあります。それは、これらの地名が山ン中に多くあるんですね。例えばですね、国分市台明寺の芭蕉。台明寺のどういう場所かと云いますと、これは、まぁ、地理の先生の専門で、私がしゃべるようなことじゃないですけれども、台明寺そのものが山ン中にありまして、いわゆる姶良カルデラの縁、霧島の台地の「耳切れ」にあります。カルデラの片隅で、”扇状地”の要部に位置するわけです。両側が垂直岩で、70メートルくらいの絶壁です。付近は狭搾部で、川や道路、家並が点在し、急斜面になっていますので、道路からは見えませんが、芭蕉はこの絶壁の直下にあり、三日月形をした棚田です。

松元町上谷口の芭蕉迫は両シラス台地の谷(だま)にあります。台地から約50メートル下ったところの迫田で、「こんな所に水田が」といったような、はじめての人には、見つけにくい場所にあります。

出水市の芭蕉は国境の、峠をちょっと下った所にあります。出水の芭蕉がなぜ番所に由来すると考えるのかと申しますと、芭蕉に番所が実在したことによります。番所のあった頃の様子は、今でも比較的伝承として残っており、失念して今ちょっと思い出せませんが、ここに番人として居住した人の姓も判っております。今日でも、土地の人は字名の芭蕉より、バンドコイの方を多用します。というより、芭蕉はめったに使いません。ご存知のように、薩摩藩の国境警備は厳重を極め、明治初期の頃まで、この付近には人を住まわせなかったそうです。私も古い墓石や石塔などを探しましたが、全て明治以降の新らしいのばかりで、江戸時代のものは発見出来ませんでした。芭蕉部落の人達はほとんどが石工か杣師で、明治初期の頃、天草や広島県からの移住民とのことです。墓が新らしいのも道理で、そう云う状況を踏まえれば、番所(ばんしょ)＝芭蕉説も当然かも知れません。

このように、芭蕉の地名はなぜか山や人家の少ない所に多くあります。もし芭蕉を植生地名とするならば、なぜ山中ばかりにこの地名が多くあり、人家近くに少ないのかが問題になります。普通に考えれば、山ン中に芭蕉があれば、それと同密度で、人家近くにあっても良さそうなハズです。このことに引っかかりを覚え、長い間こだわっていました。ところが、この暗疑がヒョイなことから晴れました。本日は見えておりませんが、肥後先生にＳＯＳを出し

まして、「いけなもんじゃろかい」と肥後先生に専門家としてのアドバイスをお願いしました。折り返しの返事で、貴重な文献のコピーを頂きました。その中に、松尾芭蕉の名前や、夏目漱石の家の庭に芭蕉が植られてるなど、文人に好まれ、また、仏家に多く植られる一方で、一般には忌み嫌われた由の記事があり、「これだ」とようやく納得出来た次第です。

芭蕉は別名を「庭忌草」とも云うそうです。なぜかと申しますと、芭蕉の葉は――バナナの葉を想像して頂くと都合が良いのですが、専門用語で何と云うのかは知りませんが、葉脈が簡単に分解するからだそうです。椿の花はすぐ抜け落ちるので、見舞の花としては忌むように、芭蕉もエンギが悪いと、庭先に植えるのを避けたというのです。従って文献によっては、「西国にては神社仏閣より外は植えず」（茅窓漫録）と書いたのもあります。肥後先生から送って頂いた資料で、長年の疑問が解け、やっと納得したわけです。自分一人で考えていては、恐らくこんなに早くは解決しなかっただろう、人にも尋ねてみるもんだなぁと、認識を新たにしている次第です。

そう云うことで、このような席では「解答」を発表する場ではないかと思いながら、判らないなら判らないなりに、疑問を問い掛けることによって、何らかの反応が得られたら、それが会の盛り上がりになるのではないかと考えたものですから、敢えていろいろな地名を持ち出したわけです。何とも締まらない話で恐縮でしたが、これで終ます。長時間にわたって御静聴頂きましてありがとうございました。

（　小　休　憩　）

【　質　疑　応　答　】

平田：　後半は質問・意見交換の時間に入っていきたいと思います。まず、今日お配りした資料のうち、袋に入ったのは、発表者の江之口さんのものです。それから、『会報』の方ですが、本来は今日16号をお渡ししなければいけないんですが、全部打ち終っておりませんので、次回に16号と17号を一緒にお配りします。14号と15号をやっと作り上げたわけです。前回の14号が中途半端になっておりましたので、前回お見えになった方には、13ページ以降を入れてあります。そう云うことでお許し下さい。

それから、最初にお断りしましたように、今日は肥後先生が急に具合が悪くなられたんで、江之口さん一人に、大部無理を掛けました。肥後先生がおられたら今日のテーマが「植物に因む地名」であったので、最後の「芭蕉」あたりは、おもしろい展開になったと思います。

「老神神社」については、二年程前に国学院大学の乙益先生が、国分に訪ねて来られまして、老神って云うのはどうも霧島本来の神のようだと、だから鹿児島県で出来るだけデータを集めてくれと云われたんですが、急々に小字一覧から引くユトリがなかったので、『三国名勝図会』とか、それらの資料を届けた記憶があります。それで、江之口さんが乙益先生と連絡とられる時には、私が紹介したいと思います。そう云ういきさつがあります。

それから「紫尾」の話と、前回の時にも出た「クルス」の話、これは16号の追加として処理をしたいと思います。さぁ、何からでも結構ですから、御意見を出して頂きたいと思います。　本田：　レジメの『老神神社分布』のNo８番、大井大明神の記事の中に「大井神田／三拾（畝）」とありますが、この「畝」の字は実際は書いてありませんね。

江之口：　はい、そうです。書いてありません。恐らく「畝」ではないかと思いましてので、勝手に入れました。

本田：　中世文書の場合、大概「卅」と書いてあります。これは、畝じゃなくて、全て代(しろ)です。従って、三拾と書いてある場合は30代(しろ)のことです。三拾畝と云うのは３反歩ですから、とんでもない広い面積になります。一代は7,2 歩で、一反は50代(しろ)です。当時の一反は360 歩でしたから、これを50で割りますと7,2 歩になるわけです。三拾は30代(しろ)のことですから7,2 歩の30倍は216 歩。これはおおよそ現在の７畝分に相当します。三拾畝としますと３反歩ですから、30代＝７畝の場合とは大変な違いになるわけです。

平田：　先ほど席を外しておりまして、聞き漏らしたんですが、「サゲヅル」は本来「ヒサゲ」に由来する。ヒサゲと言うのは、本田先生、灯提のようなものですか。それともヒサゲと云う、酒を入れるような器があったんですか。

本田：　とにかく下ルことを「ヒサゲ」と言ったんでしょうナ、昔は。ヒサゲと仮名で書いてありますから。

平田：　去年、国分高校の一年生に、夏休み、自分の近所の地名を調べて来いと、聞いただけのことを正直に書いて来いと、やったんですが、資料の下の方に「フサゲガフチ」と言うのが出てくるんですね。９ページあたり、下の方です。

本田：　このフサゲとヒサゲは同じでしょうね。

平田：　同じですか。このフサゲの意味が判らないんで、何だろうかと思ったんですが。

本田：　ヒとフはこの辺じゃ、人のことをフトとも云いますし。

平田：　入れ代りますか？ハハァ、そうなると意味は判りますね。

本田：　例えば『入来文書』に、フトノと仮名で書いてありますが、今ヒトノと言います。古文書は漢字じゃないわけですけれども、皆、今でもフトノと云うのに、明治の初めに、地字を決める時に、ヒトノにしてしまったんです。

平田：　あぁそうですか。そしたら、鹿児島弁ではヒとフが変ると。

本田：　そう。ヒとフと同じだから「ヒト」をはめたんですね。

平田：　あン人を、あンふとと云うわけですね。

本田：　それから、笛ヶ迫という所があるんですが、違いました、稗ヶ迫でした。それが今では笛ヶ迫と云ってるんです。

平田：　あぁ、そういうふうに変りますか。

本田：　だから笛じゃなくって、本当に稗が生えとったわけですよね。昔は。ところが明治の初期にヒエもフエも、ヒもフも鹿児島じゃごっちゃですから、品の良かふい変えたんですよ。

平田：　じゃ、フサゲはヒサゲのまちがいだそうです。

本田：　ヒサゲとフサゲは同じじゃないですか？

平田：　ヒサゲなら『広辞苑』などにもあるんですよ。「酒を入れる器」というのが。

？　：ヒョウタンのアレをヒサゲと云うんじゃないですか？

平田：　あれはヒサゴですよね。で、ヒサゴに類似したもの、とは思うんですが。

本田：　ヒサゴとヒサゲとは同じかも知れませんが、ツルと云ったら、だいたい川沿いの平地を意味する地名ですので、「フサゲヶ淵」というのは、あるいは、そんなかっこうの淵があったかも知れないんです。

平田：　あぁ、ヒサゴのような形をした……

本田：　どんなかっこうかは知りませんけど、あるいは、ヒョウタン型かも知れませんよね。

平田：　あぁ

本田：　ホント判りません。ヒサゴとヒサゲと。

平田：　ヒサゴからヒサゲになった可能性はあり得るわけですね。そのようなかっこうの淵が……

本田：　あったかも知れんのですよね。

平田：　はい。ヒサゲ淵と呼んだり、ヒサゴ淵と呼んだり、フサゲ淵と呼んだり、フサゲヶ淵なんて云う名前が付くかも知れないってことですね。このレポートの９ページで、フサゲって云うのはなんだというふうには理解できなかったんで、それを聞いて来いというふうな解説を付けておきました。

平田：　それから、この前の続きの「シビ」なんだけど、江之口さんの説明は、美しいという字を書いてあって、『和名抄』の例では「ミ」としか読まないと、そういう説明でしたよね。ミとビが変る言葉ってある。？ちょっと思い付かないけど。

江之口：　マ行とハ行は変るんですよね。

江平：　そうですね。それはそうですよ。「さびしい」と「さみしい」とか。

平田：　さびしいとか、さみしいとか、なるほどね。

江平：　「けぶり」と「けむり」、それから「かぶる」「かむる」。マ行とハ行とは変ります。

本田：　先生、フサゲヶ淵の由来ですね。ちょうど入来の「サンゼ淵」とも良く似ています。サンゼ淵は「サンゼウマノリ」で、もう今はありませんけれど。これが残っているのは入来や溝辺や横川や菱刈などですね。この中央部あった民俗で、少なくとも幕末の頃まで残っとったんです。で、入来の役場の下にある船瀬橋の下方の瀬を「サンゼ淵」と言います。三才の淵。そこの川原で、三月三日、三才馬乗いと云うのがありました。馬は三才になれば大人ですから、人間にすれば成人式に当るわけですね。三才馬を飾って、シャンシャン馬にして、キレイに

お化粧をして、五～六歳の稚児を乗せるのです。神様は水神様ですけれども、神様にお参りして。ところが、ある年に、どうしたことかその三才馬が、神経みたいになって、深い淵に飛び込んで死んだそうです。それ以後三才淵となった。今でもそう呼びます。それは本当らしいですよ。昔からサンゼ淵は危ないからあそこで水浴びをするな、気を付けよ、といつも云われました。だから、そういう事件が淵の由来になる場合もあるんですね。

青柳：　鹿児島市の、伊敷の梅ヶ渕ですか、あれにも、図書館で見た『伊敷村誌』に話が出ていたんですが、梅という殿様に仕えていた腰元かなんか、殿様の前でオナラをして、殿様から嫌われたそうです。それをはかなんで首を、だから梅ヶ渕と。今日は植物地名の話があると聞いたんで。梅ヶ渕の市街地より川下の方に、梅の木という地名があって、上に行けば梅ヶ渕になりますが、この前、自分で聞いたんですが、「梅」という地名はどこから来たんでしょうか？。

平田：　まぁ、普通は梅の木でしょうね。大阪は梅田駅と云いますね。梅田は梅の木じゃなくて、埋め立てたから埋田と、そういうような解釈を、地名をやる人たちは良くとりがちなんですけど、やっぱり、素直に梅の木があったからと、理解する方が一般的だろうと思いますね。

本田：　たまに作ったのがあるわけですよね。例えば、入来に梅村という名字が一軒あります。その梅村というのは珍らしい名字ですので由来を調べてみますと、その祖先は入来院家にお仕えをした、梅村という女中ですね。そのお仕えをした入来院の領主の奥さんですが、その奥さんは島津光久の娘のイキなんです。バイホウインと云います。梅峰院。その梅峰院が鹿児島からお嫁にお出になる時に、女官が付いて行くでしょう。非常にお気に入で、梅峰院が旦那さんをお世話して、梅村と云う名字を作ってくださったそうです。そういうのもある。

平田：　まぁ、解釈できないのは人の名前を一字もらって、そういう名字の付け方も当然あるわけですね。

江之口：　さっきの、鹿児島にあった大小路ですけど、大体の場所は判りませんか。

江平：　ショウジとスジとは関係ありそうで、どうですかね。ロムスジと云いますから。スジとシュッとはどんなもんでしょうか。

花園：　輝北町にショウジダ（障子田）と云う所がありますよ。地名と、それから人名でも載っていますけれど。障子田と云うのは用水路を意味するらしいですよ。

江之口：　ショウヅかな

平田：　ショウヅ田から？。　荘園を司どる荘司（田）だろう。

花園：　漢字では紙を張る障子田です。

平田：　その障子は当て字でしょうから。

本田：　シュッと云ったら、どれくらいまでがシュッですかね。あまり広くないわけでしょう。

平田：　あぁ、広さがですか。

本田：　そこん？？シュッなんかどう？

平田：　国分の『道帳』あたり検討して見なけりゃいかんですね。

江之口：　えーとですね、「串木野では小路をスジと云う」と『角川地名』の66ページに書いてあります。それとですね、慌てたもので先ほどは、云いませんでしたが、鏡味氏が南雲堂から最近出された『地名が語る日本語』の中に「広路と小路」の項目があります。10枚くらいの記事です。これに垂水の例が引いてあります。串木野の場合と重なるんではないかと思うのですが、「鹿児島県垂水市牛根麓では、小路(しょうじ)に通り名に筋(すじ)のよみをあて、宮崎小路(すじ)、中小路(すじ)、東小路(すじ)とよむ」とあります。私は専門家ではありませんので、学問的にどうこうだとは申しませんし、結論も出せません。あくまでも、私の個人的な考え方として申し上げただけのことで、まだまだ再考の余地が残されていると云うことを、付け加えておきます。

本田：　普通、県下では小さな路と書いてショウジと云うし、土地の人はシュッと云うですよね。東郷ではコウジと云うでしょう。

江之口：　この本の中に、かなり全国規模のデータを挙げてあります。例えば、『物類称呼』の「小路、京都にてはショウジ、江戸にては横丁と云う」などです。それから、コージと呼ぶ地域は、どちらかと云いますと、東日本に多いようです。反対にショウジは西日本……

本田：　東郷のコージは珍らしいから、前から不思議に思ってるんです。

平田：　そう、鹿児島じゃほとんどシュッと云いますよね。

江之口：　大小路もウシュッ、ですよね

平田：　それでね、この前の時に池田さん、川内の人が見えとって、センデじゃ「ウシュッ」だと説明されて、そん時思ったのは、宇宿町のウシュッだね。あれはウスッですか、それともウシュッと云いますか。

本田：？？？？？？？（テープ交換で不明）私の？？その辺の？？大きい小さい？？

平田：　だから……

江之口：　宮崎県の南郷村というのは聖明王の伝説がある所で、また唐踊りという、変った民俗芸能が残っている所ですが、そこの神門(かんど)の神門神社近くに大小路(ぉ-こ-じ)があります。もちろん、どこかで訓が変っている可能性もあるわけですが。ここは一方で京都との関係がある所ですので、途中で変ったかも知れないのですが。私が確認しているのは、南郷村がオーコージ、川内がウシュッ、あとは判りません。

花園：　先ほど云われました、姶良町東餅田のはオオショウジと読みます。

江之口：　あぁ、オオショウジ。郷土館にも行きましたが、判らんち云やったっでや。

本田：　今ん、わけ（若）し聞いたってなぁ、そりゃ、あたいまえじゃっでや

江之口：　近くまで行けば判るだろうけど、そん近くがどの辺か判らんち云やっですよ。

花園：　自動車試験場がありますね。あの近くですよ。

江之口：　そうですか、判りました。

平田：　ハイ、ほかにありませんか。遠慮なく

青柳：　あの一、スジと云うのは筋肉の筋？。

平田：　小さな道路、ですよ。筋肉の筋。

青柳：　道の広さなんかで、そこがそうですね。うちの前の広い道のことを馬場と云ってですね、馬場に遊ぶとか、スジと云ったら、外から入り込んだ所で、遊び場にもならんような狭い道で、今、漢字で書いてある小さな路ですね、この場合と、また広さの意味が違うのじゃないでしょうか？

平田：　それはあり得るでしょうね。で、それを区別するのは『国分郷の路帳』と云うのが、江戸時代の後半かな、ありますから、それでどれだけの広さの道路をですね、どう呼んでいるか、と云うのを整理すれば答が出てくるだろうと思います。『藩法集』なんか（記事が）ありませんか、中村さん？

中村：　あるかも判りませんけど、まだ、気が付きません。

本田：　小路に何々シュッ、何々スジと、私は？？？

中村：　大阪の地名にですね、何とか筋と云うのは、かなり広いスジで、南から、南北に通じているという場合は堺筋とか。大阪では南北に通っている広い道路に〇〇筋、ロロ筋と云うのがあります。

江之口：　だいたい、いつ頃の地名でしょうか。大阪といえば新らしい街ですよね。

中村：　ですから、そういった名称がいつ頃までさかのぼるかを一度調べてみたいですね。

本田：　鹿児島市なんか、横にこう、これは馬場で、縦は通り。

中村：　そう云ったのを、ちょっとお聞きしたかったですね。

本田：　鹿児島市の場合はナ、ここは中ン馬場通いやっどナ、中ン平通。そん次ゃ、千石馬場でしょう。そん次ゃ天神馬場でしょう。そん次ゃ高ン馬場でしょう。そして縦になると天文館通り――昔ゃ、日置裏門通りち言いおった。もう、今は文化通り……あや、何ち言うた。文化通りぁ。

平田：　文化通りになってる。日置裏門通りち言ったって判らん。

本田：　だから困るわけですよ。日置裏門通りち言うたれば、日置ドンの裏門があったちゅうのが判るわけですよ。海岸の方から城山の方に向ったのはみんな通り。そんなにやっぱり違ってます。先生のおっしゃったのは、大阪がそうなんですか？

中村：　堺筋というのは堺に通じるから、かなり古くからあるような名前のようにも聞えるんですけどね。

花園：　国分の祓戸神社の前の筋を「スッミッ」と呼んでいるみたいですね。朱雀大路云々の、そういう説明を何かで聞いたことがありますけど。

平田：　まぁ、昔の人は東西南北、キチンとした呼び名を付けてたんでしょうね。それを、大分混乱

するようになったんでしょうね。案外、それを整理し直す必要があるんかも知れません。

中村：　あのー、都の条坊制に類似した名称もあるかもわかりませんね。

江之口：　紫尾の柏原で地名調査をした時に、小路と云うのはお寺に通じる道だ、と云うことを聞いたことがあります。これは、そこばっかりですので良く判りませんけど。お寺とか神社とかに通じる道を小路と言うのだと。ひとつの参考ですが。

本田：　そういえば、入来の小路の場合でもお寺があった。

江之口：　川内にも泰平寺があるし、国分寺もあります。単なる偶然かも知れませんが。

平田：　神社や寺に通じる道を「シュッ」と言うわけですね。小路と。

平田：　今日はユックりありますから、遠慮なく出して下さい。発表者が二人だと、だいぶ制約があったと思います。発表になかったけど、芭蕉だね。この、レジメの一番最後の「馬上免云々」というのは、何か説得力があるような説明だけど。

江之口：　これは雄山閣の『歴史公論・86』より引いたんですが、文化庁記念物課（当時）の服部英雄の文章です。内容はそこに挙げた通りです。出水の研究会の時に、ひとつの資料として出したものです。しかし、小字としての芭蕉は、レジメの通り県内にもかなりありますし、あんまり関係ないんじゃないかなと、思うんですが。さっきの梅ヶ山の所でも出ましたように、余り難かしく考えず、芭蕉がそこにあったからだと……。

平田：　いや、今の説明を聞けば、この馬上免という解釈は、全国的な風潮としてはこれが一般的だけど、南の方では芭蕉という植物が生えていた地名と言うのもあり得ると――。

江之口：　だいたい、馬上免が鹿児島ではありません。もしそれが一般的な地名なら、ひとつふたつくらい、そういう地名が残っていてもいいんじゃないか、と思うのですが、私が調査した限りでは全然ありません。中には馬上免が芭蕉になってしまっているのもあるかも知れませんが、これだけ芭蕉の小字があれば、ひとつくらい馬上免が、そのまま転訛せずに残っとっても、まぁ、字は違っていたとしても――よさそうですけど、鹿児島の小字の中には一件も拾うことはできませんでした。

それともうひとつは、そこにも書きましたが、薩摩町の教育委員会からの解答では「味噌つくりの時に、麦麹のカビを早くつくるための敷物」に芭蕉を利用したんだということです。この辺は戦後生まれの者には良く判りませんが、そういうことでした。また、盆などには「仏前、墓前への供物の容器として使用した」とも。これの意味も、私にはチョッと判りません。さっきも申しましたように、神社とか寺しか植えないということと、何らかの関連があるのかなぁ、と思ったりしました。

それから、鶴北町の『わが町の字絵図に見る地名の由来』にも、これは上百引の小字ですが、「愛宕山の裏山の裾野で昔から芭蕉が生えていることから名付けられた地名で、現在も芭蕉が生えている」と書いてあります。そんなことから、こっち（植生地名）じゃなかろうかと、私は思ったのです。さらに『高山郷土誌』なんかを見ますと、郷土年寄に永年の皆勤賞と云いますか、功労賞として、「芭蕉布二反」とか出ていますので、……芭蕉と芭蕉布は一緒ですか？

平田：　同じだよ。芭蕉でいいんだよ。

江之口：　だから、やっぱり必要な品物じゃなかったかなぁ、それで植えられたんじゃなかろうかなぁと、思っているわけです。それから、平安時代の『和名抄』には（――『樹目大図説Ⅲ』には鎌倉時代に渡来とあるが、『樹の文化誌』には平安時代とある）「発勢乎波」のルビがあります。この「波」は恐らく「葉」のことでしょうから、やっぱり特異な葉の性質・形状が、命名時に意識されていたと思います。ついでに云いますけれど、大分県の竹田市に芭蕉谷と云うのがありまして、「両山ノ間ニ芭蕉叢生スソノ幾百株タルヲ知ラズ」とあり、近くには芭蕉瀑もあって、「高サ五丈濶サ三丈其側芭蕉樹多シ故ニ名付ク」と『豊後国志』に出ています。

また、芭蕉の群生地としては、道後公園とか、熊本市のゴーヅ湖ですか、エヅ湖ですか？

平田：　エヅ（江津）湖

江之口：　あそことか、そんなのが書いてあります。松尾芭蕉の名がありますように、さっきも話ましたが、文人とか俳人に好まれる――それは割に新らしいのですけれど、好まれながら「其葉脆く風に破れ易き故に……西国にては神社仏閣より植ゑず」というようなことが肥後先生から送って頂いた資料に書いてありました。

平田：　今日はあいにく肥後先生が見えていませんので、植物に詳しい人はおられないんですが、芭蕉って、そんな北の方まで生えていたの？

江之口：　本には熱帯ではなく、暖帯……と書いてあります。東京の嗽石の家の庭にもあったと書いてありますから、あったのでしょうね。

平田：　それは観葉植物として植えたのでしょうけど。

中村：　バショウという読み方ですね、いつからそう読むようになってのか。これなんか（倭名抄＝発勢乎波）明らかに「ハセヲ」ですよ。芭蕉もハセヲ、松尾芭蕉もマツオハセヲです。

江之口：　ハセヲは漢字でですか？

中村・本田：　仮名で「ハセヲ」

江之口：　仮名は普通、清音で書くんじゃないんですか？

本田：　まぁ、書くけれども……

江平：　そっち側に漢字で書いたそれも（倭名抄＝発勢乎波）ハセヲですよ。

中村：　だから番所なんかに通じるかと云うことですよね。馬上とか。

平田：　あぁ、ハセヲが馬上と。

中村：　馬上とか番所とか、ですよね。

本田：　あんな芭蕉の句碑なんか、後の人が建てるんでしょうナ。嵐山の角倉了以を祀ったお寺、何と云うの、大悲閣ですか。あそこの入口の、川からちょっと登った所に「花の山、二町登れば大悲閣・はせを」と書いてあります。芭蕉の句碑が建っております。

江之口：　私が調査した中では享徳四年、1455年が一番古い文献です。「はせうの門家半分」と『米良文書』に出ます。これは鎌倉ですので、あの辺まで芭蕉が生えとったんでしょうね。もちろん、先にも申しましたように、それより古く『倭名抄』に既に出ておりますが。

平田：　そんな北まで生えとったの？

中村：　やっぱり南方系の「ソテツ」を嫌う所がありますよね。庭に植えるのを。ソテツも南から来た植物ですね。ソテツを嫌うのはネ、ソテツは鉄分を含むから、カネを呼ぶというんですね。カネを呼ぶから不吉だと。で、お寺とか神社とか、そういう所には植えるけど、普通の家には植えないと。

本田：　そういえばサクラのことなんか書いて？？？ナ、あれ何だった？

平田：　一番最初サクラを云ってた？。

本田：　サクラは、昔は占いの木だったち云うから（作占）、万葉以前は、何かその辺と関係があるんじゃないですか？

小川：　ソテツを嫌うと云うのはどこですか？

中村：　関西ですね。僕が聞いたのは。

西薗：　ソテツは病人のウメキ声を聞いて成長すると云うことですね。

江之口：　ウメキ？

西薗：　ソテツは、病人のウメキ声を聞いて成長するんだと。

本田：　ウメキ声を聞いて成長するのは何の木ですか？

西薗：　ソテツです。

本田：　あぁ、ソテツがや。

西薗：　庭には植えない。普通の

江之口：　ビワも云でやね。ほんに。

本田：　まぁ、あんまり植えんですよ。あれはやっぱり。個人の家には。

江之口：　あや、ないごて植えんたろかい。

本田：　そいで今云う、病人の。

江之口：　植えちゃっとこいもあっでやね。

本田：　イヤ、不吉だとして植えないんですよ。今んし（衆）が植えても、昔んしゃ植えんですよ。

平田：　まぁ、そういうのは迷信が積み重なっていったものでしょう。今日はいろいろな話が出ました。良く判ったのは「クルス」というのが問題になっている地名だということ。それから、大小路という地名の名付け方も、まだ良く判らない。それから芭蕉と云うのは、植生地名とする考え方と、馬上免説があって、鹿児島県にはその馬上免と云うような土地はなかったと。だから、こっちの方の鹿児島県では芭蕉という植生地名と考えるべきだと。それが今日の結論ですね。

江之口：　表題にもありますように、あくまでも『難解な地名』ということです。今日のはひとつの「問題提起」でして最終的な結論ではありません。

これらの地名を考える上で、いろいろ参考になるような情報などがありましたら教えて下さい。それから、「こういうような資料を探しているのだが」というようなことがありましたら、遠慮なくどうぞ。電話なりを頂けば、出来るだけ出すようにします。おおいに利用して下さい。

平田：　ほかにございませんか、何か。

中村：　スジの話ですが、有名なのに御堂筋がありますね。大阪に。あれもこう、南北に……

平田：　南北がスジ。南北が筋で、東西が通り。

中村：　記憶がうすれていますけど、英語でstreetとか、もうひとつは何だったかな。何か方向がある程度、決まっておるということを、ちょっと聞いたことがあるんですけどね。

平田：　avenueとstreet？

中村：　avenueかなぁ。前は憶えとったんですけど、どっちがどっちだったか。

平田：　桐野先生、それはどうですか？南北の通りと、東西の通り。

桐野：　それは知らん

平田：　じゃ、12時半までの予定ですが、何かあれば出して下さい。なければ終ります。９月は恐らく肥後先生が元気だと思いますから、植生地名について、話して頂けることと思います。じゃ、何もなければこれで終ります。お疲れさまでした。

正誤表

２P左４行目	まし。	⇒	ました。
P　22	おりまけれ	⇒	おりますけれ
６P右31	『垂水録』	⇒	『垂城録』
8　右38	大きくして	⇒	大きく
10　右20	本田：	⇒	改行

地名研究会報　第１８号
A-2：かごしまちめいA 7L48/42+3
昭和６３年２月28日
鹿児島地名研究会

Ⅰ・第１８回例会　昭和６２年９月６日（日）
（出会者）　青柳俊二・池田信夫・江之口汎生・太田照男・小川亥三郎・片岡八郎・霧島浩一・郡山政雄・木場武則・西薗一俊・花園正志・浜崎盛雄・肥後芳尚・平田信芳・本田親虎・松田誠（16名）
Ⅱ・『甕藩名勝考』読会 P54～57　吾田　多夫施　金峯山
Ⅲ・資料紹介　クルス・峠・武元・鹿児島県地名関係文献一覧　紹介者＝江之口汎生
Ⅳ・問題提起　『植物に因む地名』　植物名の小字の集計・他　発表者＝肥後　芳尚

【アタ・サタ】

平田：　今日の所では問題にするとすれば、「アタとは何か」でしょうね。江平先生はお見えですかね。アタはいわゆる仇打ちのアダ、中央政府に抵抗したアタだ、と南日本新聞の『ひろば』で説明されていたようですけど。それから、多夫施は周防の国にもありますし、この説明で、よろしいんじゃないかと思います。何か問題にしたい地名が、ありましたら出していただけませんか。

アタと云うのはむつかしいですよね。昔、「ヤタの鏡」というのがありました。八咫鏡。アタというのは親指と中指の長さ、これが本来の尺で、これを一咫と云っている訳です。しかし、そんなアタという尺度の単位が地名になるハズはありません。

鹿児島の場合は薩摩半島に阿多があって、大隅半島の方に佐多岬があります。アとサと云うのは、まぁ、対比的な用語ですから、例えば、階段を「アがる」「サがる」ですね。それから、淡路の国だったと思いますが、アガタ郷があって、その隣にサガタ郷と云うのがありますから、（＊註・伊予国野間郡に英多郷、賞多郷がある）やはり、アとサと云うのは、対比すべき言葉だろうと思います。

で、アガタに対してサガタとかナガタ（長田）と云うのなら判るんですね。ところがアガタがアタに縮まったとは考えられませんので、このアタはまだ意味が判らないと考えておいた方がいいんじゃないでしょうか。ただ吾多隼人、大隅隼人と対比的に用いられた古い地名だと云うことです。

江之口：　直接は関係ないんですが、今、サタの地名が出ました。サタは要するに「サダ」ですけれども、岬の突端ということで考えていいんじゃないかナ、と思います。いわゆる、猿田彦をサルタヒコと云っておりますけれど、あれは本当はサタだとの説があって、『明治神社志料』なんかでも、九州の猿田彦神社を調べてみますと、みんな「サダヒコ」す。

サダの意味についてですが、はっきりしない点もあるようです。一説には海人族・潮流の関係で、津・港、あるいは航海術に優れた一種の「技術集団」のようにも考えれるわけですね。岬の突端と云うのは朝流が早いですから。「速吸の瀬戸」というのが大分にありますけど、あそこも昔から朝流が早く海の難所として有名な所で、反対側に佐田岬があります。また、猿田彦は一般的には、道案内の神というような概念でとらえられておりますが、これなども何か、その辺に関係があるのかなぁ、というような気がします。

平田：　だけど、そのサタがなぜ岬の神なのかとか、呼び名だという説明にはならないわけだね。ただ、猿田彦は本来サダと呼ぶべきであって、そういうのが四国にもあるし、ということだけで、サタがナゼ、どういう意味を持ったのかとの説明にはならないわけだね。だからアタもサタもむつかしい、判らないととらえておいた方がいいんじゃないですかね。

【田布施】

江之口：　それと、また元に戻りますけども、小川先生が『地名学研究10・11』に『田布施と答志』を書いておられますが、概略はどういうことでしょうか？

小川：　私の若い頃の、初期の頃の説で、まぁ、アテにはならん説です。　江之口：　昭和34年ですね。

小川：　まぁ、自信はないです。そん時の私の考えです。

平田：　『和名抄』の答西郷と云うのは、帖佐の転訛と云うよりも、田布施と見た方がいいんじゃないかと、問題にした時期があるわけですね。その時期からすると、地名研究はだいぶ進んでおりますからね。その程度の理解でいいんじゃないの。

小川：　フと云うのはハニフの「フ」ですね、ハニフ。埴(はに)に生れると書いて埴生。ニフは「赤土のある所」。で、ハニフは「粘土のある所」、タフセは「田のある所」と云う意味に、解釈したんですけど、それが当っているかどうかは自信がないんです。そう云うような解釈をして、この本にありますような、田圃の伏し家と云う説を否定しました。そのような意味のことをその時に書いたんでした。

江之口：　はい、わかりました。

平田：　何か外にありませんか。

【アタ・アナ】

浜崎：　私、今日初めて出席しました。小川先生の紹介です。頴娃の浜崎と申します。よろしくお願いします。私が先生方にどうしてもお聞きしたかったのは、頴娃の地名についてです。私共の方の郷土誌には、頴娃の地名の起こりとして考えられる一番目は、今、出ております婀娜の国の膳殖の屯倉と。これは『日本書紀』の安閑天皇二年のくだりにあると。なる程、岩波の『日本古典全集』などで見ますと、安閑天皇の所に、いろんな屯倉がたくさん出てきます。その中に婀娜の国の膳殖の屯倉。これから頴娃の地名が出たんだと。まぁ、こういうことを郷土誌に書いてある。

そこで『日本書紀』を見てみますと、婀娜の婀は女篇が混っていますね。で、その岩波の古典全集の『解説』にいわく、あれは備後の国、今の広島県のことなんだと。これはどういうことか。しかし『隼人への招待』なんかを読みますと、大隅が噌の国であって、薩摩半島が、いわゆる阿多の国であり、婀の国であったと、こういう説があります。古典全集の解説は、何という人の説だったか、ちょっと忘れましたが、全然違う閑駝の国なんでしょうか。それとも、今、先生がお読みになった『名勝考』にある吾田と同じなんでしょうか。あるいは、こちらから広島の方に移住した、大住の国というのが、奈良県に小字があるように、向うに移住した、ということも考えられないのか。この辺から、ひとつ、教えて下さいませんか。

平田：　この辺はむつかしいんじゃないですか。確かに、婀娜の国、それから婀娜と、それからナガトに変るわけですから、安閑紀の穴門の国と云うのは、あっちの方だと解釈するのが自然かもしれませんね。で、これは、白尾国柱がですね、安閑紀の婀娜の国、婀娜の国は阿多を言ってるんだと。これは『甕藩名勝考』の著者の解説。で、この安閑紀の婀娜と読むのか、婀娜と読むのか、白尾国柱はアタと読んで、こちらの阿多と結ぶ付けたんですね。アナと読めば中国地方ですからね。

浜崎：　今、その婀娜が、安那になっているんだと。好字を使わなきゃならんと言って、安那郡になっている、といったような説明が、岩波の本に出ています。

【金峯山】

平田：　金峯山と云うのは、あちらこちらにあるようですが、金が採れたんでしょうか。そっちはどうですか、多布施の方は。ただ信仰的な名前で金峯山としたのでしょうか。

江之口：　今では……、地元ではキンポーサンですかね、キンプサンですかね。熊本はキンブサンと呼んでいるようですが、本来はカネノミタケと言っていたようです。奈良県吉野に式内社の金峯神社があって、訓はカネノミタケになっています。いわゆる大峯とか熊野と結び付いて、死者の国、黄泉の国といったような考え方があって、恐らく修験者たちによって、熊野信仰などと一緒に、こっちへも伝わったのだろうと思います。紫尾とか、紫尾信仰も紀伊の熊野から伝播した信仰ですし。ただ、そういう人たちは修験者で、ある種の金属加工技術に長じていたようですので、彼らが、そういう場所を見つけて、そこに信仰を伝えたことも考えられます。今、ちょっと紫尾について調査しておりますので、たまたま目に入ったもので、全くの受け売りです。

平田：　金といったら、やっぱり金属だよね。真金、黒金、白金、黄金……

江之口：　あの世の、浄土世界の金と云った意味もあると思います。何年か前（昭和58年）、大峯山寺本堂の解体修理にともなう発掘調査で、金銅仏が出ておりますが、これらは、常世が光輝く浄土世界であって欲しい、と云った、願望のような意味もあると思います。丁度、仏壇が金色であるように、直接的な金属では無くて。以上は、もちろん受け売りです。

【カネ】

本田：　カネですね。カネという言葉。カライモの澱粉をカネと云います。

平田：　そりゃ、カライモが伝わったのは新らしいですから……

本田：いや、澱粉は何でも。クズから採る澱粉もカネと云いますよね。それでクズマキカズラのことをカンネンカズラと云うでしょう。

平田：　はい、カンネンカズラ

本田：　あのカンネンカズラは「カネのカズラ」じゃないですか。以前から、カネとは何ぞやと、いつも思っているんです。カネとは、物を撰ずると云うような、意味があるんじゃないかと。石から、鉄が採れますね。雑多の混ったものの中から、その物が持っている一番真髄のものを取り出した、その物をカネと云うのじゃないかと。だから、カライモからカライモの持っておる澱粉を採ったら、それはカライモのカネだと。そんな意味はないですか？　平田：　いや、カンネンカズラは葛(くず)の根――カツの根がカンネンだと思っとったんですがね。違いますか。

本田：　いや、私の解釈です。昔からカネの……

江之口：　やっぱり、これも肥後先生だ。

本田：　やっぱり、それで、カライモんカネと鉄を採るカネは、通じる言葉じゃないのかと云う意味なんですよ。

平田：　むつかしいですね。古代の日本語の組み立てに連がってくる問題ですよ。おもしろい考え方ですね。

平田：　ほかにございませんか。なければ江之口さんが、10分ばかり時間が欲しいとのことですので、11時までの間に江之口さんから問題提起をして貰い、あとは後半にしたいと思います。

江之口：　資料を作りましたので、それにちょっと説明を加えるだけです。私のは発表ではありません。

【クルス】

江之口：　前回、時間を貰って話をしました。その中で、クルスを出しましたが、その資料が『クルス地名に就て』というのと『クルスの名義をめぐって』の文献で、内容の紹介だけで、「まとめ」をしておりませんでした。口頭説明だけで、さぞ理解しにくかっただろうと思います。帰りまして、手元の資料をまとめましたのが、一番上の『地名クルス資料』です。要するに収集資料の「まとめ」です。今では、さらに追加資料が集まりましたので、これも”古い資料”になります。余り役に立たないかも知れませんが、キリがありませんので、ここに出しました。

簡単に説明しますと、鹿児島県には「クルス」「クリス」「クロス」がおよそ50例くらいあります。数量からいきますと、全国で一番多いのではないかと思います。『クルスの名義をめぐって』を書かれた真砂光男氏も、意外だったと、ビックリしてされておりました。因みに、奈良県全体で33例、それから、和歌山県と三重県――これは旧紀伊国内に限定したものですが、40例くらいしかありません。ですから、鹿児島県の50例は数としては多い方だと思います。

それから、鹿児島県での出自は寛喜３年(1231)の「牟木浦栗栖一所」で、川内の隈之城付近です。成枝名の内、ということになっておりますが、これが一番古い記録です。その前の天承元年(1131)の久留薗もヒサドメとも読めますが、ひょっとしたら、クルス、クルソンとも読めるんじゃないかなと云うことで、参考として出しました。以上が本県における出自です。『旧記雑録・前編Ⅰ』にあります。ついでに申しますと、川内市五代のクルス原を以前は久留原と表記しており、また『角川・小字一覧』を見ますと、金峰町尾下の久留原に「クルスバル」のルビがあります。

【Ⅲ】は「栗栖」の名の付いた神様が、あっちこっちに居られると云うことです。その後に収集した資料によれば、これ以外にもあるようです。その下の【Ⅳ】は庄名、人名、または『倭名抄』に出る郷名です。このように、クルスは種々の形で、かなり

早くから出てきます。が、結局、これだけ資料を集めてみましたが、これというような結論みたいなものは、残念ながら見えて来ませんでした。しかしながら、どうも「川」と関連があるような気が強くします。具体的な集計はしておりませんが、クルスの地名は、大概が川の流域にあります。今後、この方向で調査を進めるつもりです。

【トウゲ】

次に二枚目、峠。峠は第一回目の時に平田先生が発表になりました。峠については、私も非常に疑問な点がありまして、従来説も含めてですが、以前から気になっておりました。疑問を解くには何と云っても資料を収集するのが先決と云うことで、古い頃の用例――どういう文献に、どういう形で出るかを見たのが、二枚目の資料です。あくまでも”資料”です。これも現在では、この倍くらいの用例、15世紀くらいまでの用例を集めております。ひとつの資料として出しました。

一番最初、『堀川百首』の「トウゲ」ですが『日本国語大辞典』を引きますと、「峠」の漢字をつかっております。ところが、収集しました用例を編年をしてみますと、峠の漢字は今のところ、16世紀頃までしかさかのぼれないんですね。それでこれはおかしいと云うことで、『群書類従本』を当ってみますと、仮名で書いてあります。レジメでは片仮名を打ってありますが、「足柄の山のたうけ……」と仮名です。峠という漢字はつかってありません。因みに、これがトウゲの出自ですけれど、それ以後の文献には、峠の用例は全く出てきません。静岡県の県立図書館や、南足柄市の教育委員会などに問い合せたんですが、「足柄の山」「足柄の関」などで、峠の言葉は「出自」のみが唯一の例となっています。

それから『旧記雑録・前編』中にも何個所かに出てきます。漢文の方はダメですので、私がここに引きました用例の中には、あるいは「トウゲ」とは読めないものもあるかも知れませんので、そのことを最初にお断りしておきます。峠について考える上で参考になるんじゃないかと思われるのは、先にもちょっと話が出ましたが、和歌山県は熊野信仰が、古代から中世初頭に非常に盛んで、天皇や貴族なども行幸しているわけですね。しかも御存知のように、吉野から熊野にかけては山が幾重にもかさなり、実際に「峠」と呼ぶにふさわしい地形が多いわけですね。おまけに、天皇行幸の参詣記録も比較的残っているので、この辺を重点的に当ってみると、おもしろい資料が出てくるんじゃないか、と秘かに思っています。お手元の資料には漏れておりますが、熊野古道の周辺には1200年代に10ヶ所のトウゲが出てきます。ですから、この辺が峠研究上の、ひとつのポイントになるんじゃないかと思います。

次に『伊京集』というのが一番下にあります。これは『日本国語大辞典』の用例に出ますが、いつの時代か判りませんでした。原本は国会図書館にあるんだそうですけど、問い合せてみましたが、年代までは判りませんでした。ただ、不明確ながら、1500年の頃の本ではないか、と云うことでした。そういうふうに峠には、まだまだ問題・疑問点があると云うことです。

その次の「タワ」「タオ」は参考までに出しました。峠はタワからきたとか、タオが訛ったとかの説があるもんですから、それも編年をしてみました。その他にも、まだ沢山用例がありますけれど、ひとつの参考資料です。

それから「峠」の国字が使用される以前には「嶺」の字を代用していたんじゃないかな、と云うことを感じましたので、そういうようなことも、ちょっと頭に入れておくと、いいんじゃないかと思います。因みに『鹿児島県地誌』、これは明治16～20年頃のものですが、薩摩半島の方が資料として残っております。これで当ってみましても、嶺にトウゲのルビが振ってあります。また、「峠の古字は嶺で、陸地測量部以前の地図は全てこの字が用ひられている」というのが『峠の語源に関する一考察』に出ています。ですから、嶺をトウゲと読ませるのが、いつの頃までさかのぼれるのかが気になります。ただ、そう古い頃、例えば12世紀とか、その辺までは行かないと思います。

【武元】

武元は出水の地名ですので、まとめてみました。紫尾の調査をすすめる中で、武元の「武」は嶽、または岳で、元はその麓のことではないか、と云うことに気づいたものですから、まとめたものです。余分にコピーしましたので持って来ました。見ていただければ判ると思います。

【地名の文献について】

『地名の文献』ですが、そこに書きましたように『地名関係文献解題事典』から取りました。これは昭和53年度までについてのものです。ですから、54年以降の文献、各市町村史、機関誌などはノーチェックです。これらはチェックして、後で別に作成する予定です。「＊」印を入れておきましたが、これは小川先生の文献を示したものです。まぁ、本人の了承は得ておりませんが、一応おおやけに発表されている文献なものですから、私が勝手に＊印を打っておきました。因みに、そこにも年代を入れておきましたが、小川先生は『伊敷と甲突川』というのが最初で昭和32年。以来今日まで30年間、こつこつとやっていらっしゃるんだなぁと、改めて驚いていると同時に、深く敬服している次第です。

中央付近が1行だけあいておりますが、上段が鹿児島の地名を扱った文献です。下段は直接、本県の地名を扱っているわけではないのですが、本県にも同じような地名があって、それを考える上で、参考になるのではないか、というような文献です。いずれにしましても、本県に関係のある文献だということを、書き添えておいて下さい。

例えば、下段の左側4行目に『連雀町』というのがあります。これは、高尾野町に連尺野という地名があるもんですから、参考になろうと思い、挙げておきました。その下の下の『銭亀塚由来記』も、いわゆる亀割の地名が、県下各地にあるので出しました。その下にも『車田採訪記』がありますが、これも本県にも分布が見られるで地名で、前回の時に下野先生が、ちょっと触れられましたけれど、それを考える上で目を通しておくといいのではないかと思いましたので、ピッグアップしました。私もかなりの文献を収集しておりますので、もし興味のある地名がございましたら申し出て頂ければ協力します。手元にない文献でしたら、各地の図書館なんかを利用されるのも、方法ではないかと思います。参考にして頂ければ幸いだと思います。以上です。

【質 疑 応 答】

平田：　これは文献名だけで、文献そのものは集めていないわけだね。

江之口：　はい、半分くらいは持っています。

平田：　彼はモノ集めですから、持っているだろうと思います。

本田：　江之口さんにはいつも驚くわけだが、本当にありがとうございます。

平田：　あのね、今、最後にふと思ったのだけどゼニカメヅカ。銭亀（瓶）塚というのは、県内にも沢山ありますよね。亀割とか、そっちに結び付けなくとも、銭神信仰でいいんじゃないですか。それから、ふと思ったんだけど、千貫平も「千貫＝銭神」ですね。それから、入来から蒲生に抜ける峠に千貫岩とか云うのがありますね。あの千貫岩も一貫、二貫の、そんな千貫じゃなくて、やっぱり銭亀（瓶）から変化したと見た方が、理解し易いなと云うことを感じますけど。

江之口：　じゃっどかいね先生。あややっぱい、「太か岩」ち云うこっじゃなかどかい。

平田　じゃ千貫平はどういうこと？

江之口：　「千」は単に大きいということで、具体的な数量ではない、百(ゟゟ)が百とは必ずしも限らないように。

平田：　いやいや、千貫の眺め、値千貫の眺めなんて、そんなシャレた名前が付けられるかと云うことだね。

本田：　江之口さん、入来にな、元禄12年の『縄引帳』があるでしょう。縄引帳と云うのはナ、村境を全部測量して田圃がなんぼ、何間何町、道路も入来の原標から村境まで計る。それに出てくる峠は沢山あるが、峠という言葉は一行も出てこない。だから、元禄年頃、今から三百年前でしょう。その頃は峠という言葉はなかったんじゃないでしょうか、我々の町村では。そう思います。

江之口：　今、峠の話が出ましたけど、御手元の資料に入れてありますように、入来はですね、ひとつには1251年、建長3年の古文書に出て来ます。これは、当時の入来院の西端の村であった「楠元」の境界を示す文書でして、実は私の所なんですが、この中にはっきりと「西ハかきる一てうの江口、同からす山の、同きせのお、同うつきれ山のたうけ」というふうに出ています。

本田：　あれは峠ですか。

江之口：　はい。それから『入来文書』では「佐備塔毛」というのが、これは岡山県ですが、出てい

ます。これは、しかしこっちの峠ではないですね。それから「新塔下」というのが元亨２年、1322年。これはトウゲと読むんでしょうね。『入来院清敷南方検地帳』の中に出ます。それから、その下の1338年に「洞塔下」。これはホラトウゲと読むんでしょうか、断言はできません。出水の田島先生は、これをトウゲとは読まれませんでしたが、私はそうじゃないかと思っているんですけど。それから、もっと古くですね、文治４年に「上毛夜木瀬任下」。この「任下」も私はトウゲと読むんじゃないかな、と思って挙げたんですけど、伊作郡外小野の内として出てきます。日吉町付近です。もし違っていたらごめんなさい。そういうことで、こっちでもトウゲという言葉は結構あったようです。

それとですね、峠と云えば一般的には鈴鹿とか臼井とか足柄とか、昔から名の知られた峠は多いんですが、これらの中に「峠」の用例は、ほとんど発見できません。例えば鈴鹿峠の場合もかなり突っ込んだ調査をしましたが、鈴鹿の山、鈴鹿の関、鈴鹿の坂などの形でしか確認できないのです。恐らく「鈴鹿峠」の名称は後世になってからのもので、早くても、江戸時代になってからのものじゃないかと思います。

それから、もしかしたら、現在の我々と、当時の人たちの、峠に対する概念は違っていたんじゃないかなとも思っています。これらは、ほとんどが『譲り状』『検地帳』に出る地名です。例え道が通じていなくても、いわゆるＶ字形に稜線がタオレていたら、それが「峠」であって、必ずしも道路の有無は問題ではなかろう、と考えております。今後いろいろ調査をすすめれば、峠の輪郭がもう少し明確になるかも知れません。今、私が考えていることを、そのまま出した次第です。もし資料の内容が違っていたり、記載漏れがあれば御教示下さい。先生方にいろいろ教えていただけるように、その為に資料を出しているのですから。

平田：　はい、じゃ、以上で前半を終ります。五分くらい休みましょう。

（小　休　憩　）

【問題提起】　『植物に因む地名』；肥後芳尚

肥後：前回はどうもすみませんでした。前回の分に、少し付け加えて、研究発表というより、話題提供というようなつもりで話をさせていただきたいと思います。

ご存知のように、鹿児島県の地名の特徴と云いますと、古代地名が比較的多く残っているとか、地形地名が多いとか、いくつか挙げられますが、資料に書き上げてみました。古語が他の地方より多いことが地名を分りにくくしており、その古語がなまって語り言葉に後で漢字をはめたので、益々意味の分らない地名となっています。植物に因む地名を見ましても、理解に苦しむ地名がたくさんありますが、一方、古い地名は古い文化、貴重な文化遺産であるとも云えますので、この解明は大きな意義を持っているのではないでしょうか。

次に植物に因んだ地名を考える場合の資料をいくつかあげました。（表－１）まず、植物の古い名前を知る必要がありますが、植物についての『古典』は鹿児島ではなかなか見られません。樹木和名で有名な臼井光太郎氏の『樹木和名考』があります。

次に現在刊行されているもので、鹿児島県でも見られる本に、上原敬二先生の『樹木大図説』（Ⅰ～Ⅲ）があり、樹木の方名についても書いてありますので、よく利用しています。資料にもあげた小川豊氏の『災害と植物地名』は特異な本で、建設省技官である小川氏が災害予知について、経験から植物地名について書かれたもので、今回参考にしました。資料に、同書から「栗」に関する地名についての記事を参考としてあげておきました。

地元鹿児島県の植物名について書かれたものは、内藤先生の『鹿児島民俗植物記』、初島先生編集の『鹿児島県植物方言集』があります。それから、東大の倉田先生は『樹木と方言』『植物と民俗』の中で、出水・鶴田・田代における採訪で集められた植物方言について書いておられます。地名辞典には角川の『鹿児島県地名大辞典』があり、今回調査対象の13市６町の小字名も、同辞典・資料編の「小字一覧」によりました。

前置はこれ位にしまして、実際に鹿児島県の植物に因んだ地名研究の第一歩として、名瀬市を除いた県下13市と地域分布を考えて薩摩半島の知覧・日吉町、県中心部の姶良地方から姶良・牧園町、大隅半島の末吉・根占町の６町を選び、その市町の植物名の小字を拾い上げ、調査対象としました。

その前に前記の６町の小字数、植物名の小字数について調べたのが資料の表－２です。平均値からみると、約１割が植物名小字となっています。その次の表－３が上記13市と６町について、各植物名の小字を集計したものです。表をご覧頂けばどのような地名がどれ位あるかお分り頂けたと思います。

最初に地形地名の確認は「まず現場を見ること」だと申しましたが、残念ながらほとんど現場を訪ねておりませんので、話題提供の形にさせて頂きました。そういうことで、植物に因んで地名が実際その植物と関係ある地名か、それとも表音に漢字を当てはめたもので、字体とは何の関りのない地名なのかは現場を見なければ軽々に判断はできません。

植物に因んだ地名の種類は表－３によると、全体で　ありますが、これとても上中下、東西南北、左右前後、頭尻などの接頭・接尾の語を省略していますので、実際にはもっと多くなります。

各樹種名に因んだ地名の検討は次の機会に譲りますが、字地名についてひとつひとつ現場を確認することは大変な作業で、しかも現場へたどり着くのはその土地の人達の協力無しではできません。また、行政による字名変更がいとも簡単に行われ、住民もこれについて別に異議を唱えないといった傾向が一般的なのは非常に残念です。このような状況の中で「ユックリ」と「急がねばならない」のが地名研究のむつかしいところです。

今日は要領を得ない話となり、申し訳ありませんでした。この辺で終らせて頂きます。なに分研究の日も浅いので今後共よろしくご指導賜りますようお願い致します。

【質　疑　応　答】

平田：　どうもありがとうございました。角川の『小字一覧』から、松とか竹とか、いわゆる木本・草本の植物地名を挙げられての話でした。抽出された分で、だいたい植物地名が１割あるということです。統計的に処理できたと思います。まぁ、その点では一つの成果だったと思います。一般に自然地名は地名の中の半分、５～６０％あるわけですが、その中の１／５は植物地名だと考えていいんじゃないかと思います。それから植物地名について、先ほど小松の例、桜の例がありましたが、他県の地名研究の方は、なるべく植物地名というものを、地形地名で解釈しようという傾向があります。それは、地名研究協議会ができた時に、奈良田の地名で私が論争をやったんですけれど、奈良と云うのはナラガシ、植物の地名だと、いや、そうじゃないというんで、『地名用語語源辞典』を書いた溝手理太郎という人と論争をやったんですが、私の方が確かだと自信を持っています。植生地名と云うのは、決して少なくないんだと。自然地名の１／５は植物に関する地名だと。肥後先生の作業はそういう分析だったと思います。

それから、もう一つ大事な提起は地形図に早く小字を落す作業ですね。これは大事だと思います。その作業を進めると、消えた小字が良く判るんじゃないかと思います。鹿児島県で地形図に小字を落してあるのは、この前、松田先生が提供された姶良町が落してありますね。それから、隼人町が落してあるんじゃないかと思います。それから指宿が落してあると思います。川内は大字単位で『字絵図集』が作られましたが、１／１万分には落としてないんじゃないでしょうか。そういう作業が大事だろうと思います。私がやったのは、薩摩国府周辺と大隅国府周辺の小字復元だけです。やはり地名研究の基本というのは、そこだと思いますので、それぞれお住まいの所で、少しずつでも例を増やして頂きたいと思います。今日の所で何か質問がございましたら遠慮なくお出し下さい。

浜崎：　先生、今の地名ですね。肥後先生の話の中でショウブのことが出ましたが、うちの方の字にも菖蒲田というのがあります。これはハナショブが生えておる菖蒲田の意味でしょうか。ショウブじゃなくて、正ブ田と書いて「ソッダ」と発音する、こういう例もあります。また植物の菖蒲を書いたのもあります。『広辞苑』を引いてみると、小歩とは一反の 1/3、つまり百歩だと、百二十歩の時代もあったと、こういう説明がある。そうすると、植物地名か、それとも、いわゆる小字の地割をする時に、小さく区切った田圃であるか、二つの解釈が出来ると

思うんですが。

肥後： 場所はどういう所ですか、田圃のありそうな所ですか？。

浜崎： 今、先生のおっしゃったように、頴娃町の小字を 1/1万分の地形図に落して貰って、一部大きなヤツを持っているんですが、まぁ、現場に行ったわけじゃないんですが、それなどを見ますと、やっぱり、なるほど小歩田だろうなぁと、小さい、アレだろうなぁと、そんな感じがするわけです。

肥後： 古い地名は、「田」と書いてある場合は田圃じゃなくて、「処」ですね。「田」にかかわっては、こだわってはいけないと云うことですね。

浜崎： 菖蒲田、秡田……

肥後： 菖蒲田というのは一般には、資料にも詳しく挙げてありますけれども、菖蒲が生えている所もあるでしょう。そりゃあ、ないとは言えません、昔のことですから。しかし、これはあとでまた詳しく申し上げますけれど、ホキですね。

浜崎： 凹み？

肥後： そうですね、凹み。そう言う所に付けられた例が９割以上だと思って大丈夫。菖蒲田、菖蒲が付くところの地名は……

浜崎： やっぱり、植物名が付いても？

肥後： 植物名が付いても、ですね。特に植物名の中でも、今、言われたショウブと云うのは、特徴のあるというか……

本田： ショウブの付かん村ちゅあ、ない程多いんじゃないですか、ショウブは。

浜崎： ショウブの字(あざ)が多いもんですから。しかも、それぞれ字(じ) が違うんですよ

本田： まぁ、字(じ) は別ですから。

浜崎： いろいろ違うのを考えるというと、植物名だろうか、それとも、今云うように小さな地割をした段階の……

本田： 私の家の近辺でショウブの付いたところは、やっぱり小さな溝が流れていて、狭いところの……、そんな場所にショウブの地名が付いているんですけど。

浜崎： それじゃ、地形名と解釈されますか、植物地名と解釈されますか。

本田： いや、字はそりゃ、植物名になっていますけれど、地形のものが多いんじゃないかと思うんですけどね。

平田： いや、だからショウブ田は、まぁ、自然に考えれば、ショウブの植物地名ですね。それから、地割の地名もあるでしょうし、だから、場所によって解釈しなければいけないんじゃないかな。全て菖蒲田とあれば、ショウブが生えていたというふうな、単純な考え方をしちゃいけないと云うのが、地名研究になるんじゃないでしょうか。

江之口： いろいろあるんでしょうけれど、私も全部は把んでいないんですけれど、いわゆる、「ショウズ」だろうと思うんですがね。湧水地と云いますか、ソーズ（僧都・早水）というような言い方もあるんですが。

肥後： そうですね、ソーズ。

本田： 似たような地形ですよね、ショウブの付いたところは。

江之口： もちろん、「ショウブ」の全部がそうだとは云いませんが、そのような気が、私はするんですが。ですから、最終的には、先ほどから肥後先生も強調されますように、「現場」をおさえなければ、何とも云えないですね。

肥後： 現地を見ないと云えないわけですね。それには、やっぱり地形図に落して貰わないと、どこがどこか判りませんので。垂水の風呂ノ段がいつか問題になったですね。そこへ行こうと思ったんですけれども、どうにも行けないし、役場で、地形図にこの辺だと、線を引いて貰ったんですが、そこへ行く道が判らないんですよ。ずーっと奥の方で。

平田： なるほど。

本田： 今、一番の問題は、古い地名がどんどん無くなることですよね。勝手に変えるから困ったもんですよ。

平田： だから、早く１万分１の地図に押えといて、誰でも行かれるようにせにゃ、いかんわけですよ。

本田： おとといい、東郷で会があった時、ちょっと出かけて行ったんですけど、奈良の網干先生が今こまっておいでのようですが、奈良市の郊外に団地ができたところ、そこに朱雀とか右京とか左京と云う町名をつけた。ところが、その奈良のような大事な日本の古都にですね、朱雀大路といったら、大内裏の真正面の道が一本しかないわけですから、朱雀と云うのは、それを団地を造ってですよ、奈良郊外に。そして、土建業者が朱雀路、右京左京という名を付けて、そこの住民たちが喜んでいるんですよ。

平田： 混乱する……

本田： そいで関西大学の網干善教、あの先生一人で頑張って、バーカなことをしてくれるなと云ってるんですよ。奈良の、そう云う歴史を否定するようなことを、奈良市がやってしまう。だから、是非それを変えろと。ところが、住民のアンケートをとりましょう、ということになって、とったら90%が「今のままがいい」です。だめですよ、こりゃ。だから、おとといも言ったんですがね、こう云う文化財保護と言うような問題を、アンケートで決めるのはとんでもない。多数決の原理を、これに当てはめちゃいかんと。私、いつもそう思っているんですがね。多数と云うのは、こりゃ知らん人が多いんですから。歴史を研究した人と云うのは、ごくわずかしかいないんですよ。地名を一所懸命やるのもこれだけ、鹿児島県では。

平田： そうです。

本田： 地名が変ろうと変るまいと、「関セズ」の人が多いんです。ところが、今の町村を見てみなさい、どんどん町名が変る。鹿児島市なんか、その見本じゃ。あすこそこ勝手ん地名を付けて、ほんにいかん。皆さん、どうですか。

平田： その通りなんですよね。

本田： 奈良市みたいにですよ、新らしい団地が出来て、朱雀通りができた、右京ができた、左京ができた、神武と云うのもできてるんです。そして住民の90%は「ああ、今の方がいい、品がいい」と。歴史学者が一人反対すると、「ああ、老いぼれた歴史学者が一人でつまらんことを云う」と大騒ぎしているんです。行政が、その説を採る場合に、いやこれは皆の人が希望しますと、どうも、そこんとこが困ると云うんです。

平田： これは、地名だけでなくて、あらゆる文化財にも通じてくるとも思うんですけども、啓蒙しなければいけないことが、ひとつあるんですね。一般の人々は、刑法に触れたらこう云う罰則があると云うのは、判るわけですね。文化財と云うのは、それと同じくらいの価値があると云うことを、認識しなきゃですね、させなきゃ、これは大事な問題だと云うことは判らない。で、そんなものをワケの分らない連中が、多数決で、常識で決めている、推し流して行きますからね。 本田： それが困るわけです。歴史を否定するわけですからね。

平田： まぁ、大いに啓蒙しなければいけないでしょう。そのためにはお互いに頑張りましょう。外にありませんか。なければ、じゃ、終りましょう。

平田： 前回と前々回は、２時間半に延ばしたのですが、２時間半やると、今度は、私がまとめるのに苦労するもんですから、２時間がちょうど良かろうと思います。例会日は、本当は先週の予定でしたけれども、互助会への申し込みが遅れまして部屋が空いていませんでした。ようやく今日、この部屋だけ空いていて確保できましたので、勝手に一週間遅らせました。それから『会報』の方も一号分遅れております。これは、私の怠慢なんです。『南日本新聞』の夕刊に連載しておりますが、これは60回まで書きます。そちらの方も、仕事でちょっと遅れております。それから、次会12月の第一日曜日は『地域文化を考える』ですが、今年は、どう云う形で進めるか、実は、皆を召集できないので、まだ、話が煮詰っておりません。次は11月の終りあたり、現地研修と云うことですが――。一番最初は川内、昨年は姶良、今年はどこを見ますか？

肥後： 知覧は誰かおられませんか、おもしろい地名が多いんですが。

江之口： 入来もいいんじゃないでしょうか。

平田： 行くからには一万分の一の地図をコピーして行かなきゃ。どっかないかな。……国分で考えておきましょうか。ちょうど今、大隅国分寺の入口にさしかかるところで、まだ、掘ってるでしょうから。じゃ、11月の第４日曜あたり、国分に集まりましょうか。で、国分を歩いて、もし、その遺構が開いていたらそれを眺めると云うことで――。で、地域文化研究会はどうなるか、今から話を詰めます。じゃ、そう云うことで、今日はこれで終ります。

地名『クルス』資料

鹿児島地名研究会
62-9-6　江之口汎生

【Ⅰ】地名分布（県内＝『角川・鹿児島』小字一覧より）

1 久留原クルスバル　金峰町尾下
2 久留須　栗野町木場
　大口市針持
　鹿児島犬迫・西別府
　東郷町藤川・斧渕
　鶴田町柏原・紫尾
3 久留須山　栗野町米永
4 久留巣　川内市五代
5 久留守　宮之城町久富木
6 久留主　川内市中郷・田海
　樋脇町市比野
　祁答院町下手
7 久留主原　入来町浦之名
8 上久留主　〃　〃
9 久留主城　樋脇町市比野
10 久留原　金峰町尾下
11 久留水田　蒲生町下久徳
12 クルス　輝北町諏訪原
　川辺町清水
13 クルス谷　福山町福沢
14 栗須　鹿屋市秡川
　串良町細山田
15 栗須田　松山町新橋
16 西栗須　財部町下財部
17 閉山栗須　〃　北俣
18 金丸栗須　〃　〃
19 今西栗須　〃　〃
20 茅原田栗須　〃　〃
21 ウグルス　宮之城町平川
22 小栗巣　大口市曽木
23 小グルス　川辺町古殿
24 小栗栖　〃　神殿
25 小久留主　祁答院町下手
26 池栗須　吾平町麓
27 上ぐるす　加世田市武田
28 下ぐるす　〃　〃
29 下上ぐるす　〃　〃
30 下中ぐるす　〃　〃
31 ハナクルス　牧園町高千穂
32 黒巣　〃　三体堂
　福山町佳例川
33 黒須　牧園町万膳
　菱刈町前目・川北
34 黒須田　隼人町嘉例川
35 黒須籠　喜入町中名
36 黒ス原クロスバル　金峰町白川
37 黒園　鹿児島町宇宿
　宮之城町泊野
38 黒園山　山名・菱刈町
39 黒園下　牧園町万膳
40 高畔須　日吉町吉利
　栗柄　佐多町辺塚
　熊須　日吉町永吉
　飛久留ヒクル　出水市下川内
　クノス　川辺町野間
　阿久根市鶴川内
　クノ巣　日吉町与倉

【Ⅱ】文献・記録・A（鹿児島県＝主に『旧記雑録・前編Ⅰ』及び『同・Ⅱ』による）

＊天承元年1131　畠地一所字由久留園　◆参考『国分台明寺文書＝旧記雑録・前編Ⅰ No7 』
寛喜3年1231　牟木浦栗栖一所　川内隈之城付近「成枝名」の内　『旧記雑録・前編Ⅰ 161P』
文暦2年1235　久留須門　『角川鹿児島325P左・重久名（国分）』の文中
＊貞和5年1349　久留原　◆参考・高城郡内新田領クルスバル『旧記雑録・前編Ⅰ No2292』
応永5年1398　久留諏平　田代町　『角川・鹿児島268P』
＊応永18年1411　久留名　◆参考・大口「久富名」の内『旧記雑録・前編Ⅱ No 822』
永正10年1513　久留主貳段　阿久根院の内『阿久根大居寺文書＝旧記雑録・前編Ⅱ No1844』
年不詳　平くるすの門　川内わかまつミやうの内。同名は1400頃消滅『入来文書218P下』
＜古陣・久留主ヶ原＝上記久留主原＝入来町浦之名に関連カ＞『旧跡調帳＝地誌備考146P』
＜栗須川＝鹿屋市秡川＞『シラス地域研究No３号101P』＜栗栖川、小川也＞『肥後国誌上621P』
＜黒園岳＝高山＞土俗相伝えて火々出見命遊行玉ひし所也と云山上に一神石崛立す『百図考』
◆参考『神社誌』その他に「久留社＝川合陵カ」が出る。上記「久留原」に関連カ

【Ⅲ】文献・記録・B（［諸国の神名］＝主に『群書類従』による）

＊＜狗留孫山権現社＝大河平村＞祭神三座。熊野三所権現是ナリ。栄西禅師勧請といふ寛正四年14の鰐口を納む『三国名勝図会』『南日本新聞 S56・9/12.13.14or12/10』
＊＜倶留尊山＝三重県美杉村＞山頂にある倶留尊大権現（祭神不詳）に由来する
＊＜黒尊山＝愛媛県宇和島＞山麓に歓喜寺、山頂に用明帝時の開基という笹山権現『地名辞書』
＜栗栖神社＞　栗栖連の氏神社、在河内国若江郡　862or883に重複授位記事『式内社調査報告』
＜栗栖田神＞　『筑後国神名帳＝続群（３上－218P）』天慶４年941 三宅郡・正五位上
＜栗栖地神＞　『尾帳国神名牒＝続群（２－267P）』春日井郡正四位下
＊＜栗野三所権現＞　〃　〃　〃　〃　従二位上
＜栗栖大神＞　『紀伊国神名帳＝続群（３上－211P）』正一位紀氏栗栖大神
＜栗栖田明神＞『美濃国神名帳＝続群（　　P ）』大野郡（角川・岐阜の項目ヨリ）
※『群書解題・六415P』に＜若州遠敷庄上下宮笠朝臣ェ栗栖治右衛門相伝也＞とアリ
＜栗柄社＞　『和泉国神名帳＝続群（３上－188P）』従五位上栗柄（栖カ）社
＜栗野三所地神＞◆参考『尾帳国神名牒＝続群（２－267P）』春日井郡従二位上
＜玖留見神＞　◆参考『筑後国神名帳＝続群（３上－216P）』　／若狭国神名帳解題

【Ⅳ】文献・記録・C（①・出自　②・和名抄　③・姓氏　④・古代～中世の庄名）

①・出自　……栗栖太里：＜有御野国本簀郡＞　『大宝二年702戸籍』＝和名抄美濃国本巣郡栗田郷
②・和名抄……播磨国揖保郡栗栖郷（久流須）＝栗栖里『播磨国風土記・和銅６年713』
大和国忍海郡栗栖郷（ルビなし）＝栗栖乃小野『万葉集＝養老年間720頃』
紀伊国牟婁郡栗栖郷（ルビなし）＝栗樔郷戸主『正倉院文書・養老５年721』
山城国宇治郡小栗郷（乎久流須）＝小栗郷『私本・延暦10年778』
山城国愛宕郡栗野郷（久流須野・久留須野）＝栗栖野『後紀・延暦14年782』
美濃国本巣郡栗田郷（ルビなし）＝上記「栗栖太里」から推定　付近に栗田荘アリ
美濃国郡上郡栗垣（原）郷（ルビなし）＝［同上・邨岡良蕩氏は栗栖の誤記とする］
＊伊勢朝名郡訓覇郷（久流部・久留部）　＊大和城下郡黒田郷（久留田）黒田＝『孝霊記』

③・姓氏　……栗栖連　：河内国若江郡栗栖神社　栗栖首　：左と同カ　又大和忍海郡栗栖郷カ
栗栖直　：大和漢坂上氏の族　栗栖史　：美濃国カ　出自は　天平17年 745
栗栖田君：御野国本簀郡の名族　栗栖野島賣：山城国愛宕郡栗野郷の名族

④・庄名　……美濃国栗田郷　（現・大野郡or本巣郡域カ）貞観14年 872「栗栖太里」から推定
播磨国揖保郡　［角川地名未刊］
紀伊国栗栖庄　（現・和歌山県名草郡郡の内）保延４年1138＜応寄栗栖庄於粉河寺＞
紀伊国栗栖川荘（現・和歌山県中辺路町付近）明応７年1498の棟札に無漏郡栗栖川荘
山城国栗栖野　（現・京都山科区）『日本後紀』延暦15年 796
栗栖院常羽御厩（現・茨城県八千代町）『将門記』承平７年 937

【Ⅴ】クルス全国一覧（『角川地名』＝既刊分より　上記以外＝主に近世の地名）

栗栖 ・1600 大阪市能勢町
・栗栖 ・1695 滋賀県多賀町
栗栖 ・1596 三重県御浜町
栗栖村　庄カ紀氏栗栖神社
栗栖村・1644 大分県朝地町
栗栖村 1557 広島県佐伯市
栗栖川村キンダイ 和歌山県
栗栖野村・1667 高知県三原村
来栖 ・1278 茨城県笠間市
栗巣 ・1596 岐阜県大和村
黒須 ・1644 埼玉県入間市
黒須川村1547 埼玉県入間市
黒須田 1633 横浜市緑区
黒須野 1422 福島いわき市
・蔵土 クロウズ　和歌山古座川

【Ⅵ】宮崎県分布（『角川・宮崎』小字一覧より）

栗巣（三股・長田／国富・八代南俣）栗巣野（小林・東方）栗栖（南郷・津屋野）久里須（野尻・三ヶ野山）黒須田（日南・西弁分）黒園原（野尻・紙屋）クルソン峡谷（えびの大河平）

※［旧紀伊国内の和歌山県に大字２小字21が、三重県に大字３小字18アリ／真砂光男氏の調査］
※［『日本地名伝承論613P』中には奈良県内33ヶ所にクル（リ）スがある］

【Ⅶ】全国分布（アボック社・日本地名索引より＝１／20万の地形図に出る地名＝ほぼ大字単位）

久利須 クリス
栗巣 クリス
栗栖 クリス 2
栗須 クリス 2
栗栖野 クリスノ2
栗住野 クリスノ
来栖 クルス 2
来栖野 クルスノ
栗栖 クルス 2
栗栖川 クルスガワ
栗栖根 クルスネ
栗巣 クルス
九流水 クルス
久留巣 クルス
栗須 クルス
黒須 クロス
黒須田 クロスタ2
黒須野 クロスノ
黒周 クロス
黒洲 クロス
黒土 クロス
黒津 クロス
黒巣滝 クロス

【Ⅷ】地名由来・A（ⓐ『クリス地名について』ⓑ『栗栖の名義をめぐって』からの要約）

①・植生による　……ⓐⓑ　『播磨国風土記』揖保郡栗栖郷の地名譚
②・栗の実の苞から　……ⓐⓑ　＜くるすとハくりのいがをいふ成べし＞『和訓栞』
③・未開種族國棲・國栖……ⓐⓑ　土窟に棲みクズ・土蜘蛛とも呼ぶ『喜田貞吉著作集・８』『大日本地名辞書』『綜合民俗語彙』『常陸国風土記』
④・グリ石の多い場所　……ⓐ　方言　『平凡社・大辞典』『民俗学辞典』その他
⑤・川の曲流部（廻洲）……ⓑ　……水外を流るるを丸栖といひ栗栖といひ、反対に内に向って曲り入るを……隅とも和田ともいふ……『続風土記』
⑥・アイヌ語地名　……ⓑ　『古地名の謎－近畿アイヌ語地名の研究』
⑦・尾根（クル）上の砂地…ⓑ　『地名』『地名の語源』

【Ⅸ】地名由来・B（各地・諸説一覧＝主に「角川地名」記載分）

ⓐ・＜久留主塚＝福岡県甘木市＞＜出牛＝埼玉県秩父市＞共に聖教に因むカ『地名語源辞典』
ⓑ・＜久留須川＝大分県直川村＞流域にキリシタン遺跡が点在しクルスに……『直川村勢要覧』
ⓒ・＜倶留尊山＝三重県美杉村＞山頂にある倶留尊大権現（祭神不詳）に由来する
ⓓ・＜黒尊山＝愛媛県宇和島＞山麓に歓喜寺、山頂に用明帝時の開基という笹山権現『地名辞書』
ⓔ・＜栗須＝三重県御浜町＞　周囲を川がめぐっているから……『紀伊国続風土記』
ⓕ・＜栗栖＝和歌山市＞　水の巡る州であった……『紀伊国続風土記』
ⓖ・＜黒須＝埼玉県入間市＞　大きく屈曲しているため、クルワ（廓輪）から『黒須地誌』
ⓗ・　〃　〃　〃　黒洲の当て字『県地誌』
ⓘ・　〃　〃　〃　「畔」の義『豊岡町史』
ⓙ・＜栗栖野＝高知県三原村＞クリ（岩礫）と同根で常時栗石がころがって……『土佐の地名』
ⓚ・＜久利須＝富山県小矢部市＞尾根　クレ・クリは尾根、スは砂地『地名の語源』
ⓛ・＜栗須＝富山県八尾町＞　大長谷川の左岸　栗の多い土地柄……『婦負郡誌』
ⓜ・＜栗栖＝広島県佐伯市＞　クルスとも　栗の大木があった……『国郡志書出帳』
ⓝ・＜御栗栖野＝京都＞　（小クルス？）　中古朝家の牧場にて御栗栖野といふ、見苦し野と云所なり『山城国名勝志』
ⓞ・＜黒周クロス＝島根県益田市＞上長谷川・湯田川の流合点　原城々主「黒谷周防守」に由来

【Ⅹ】その他・雑載（問題点・参考・備考）

＊黒尊・倶留尊は明らかに「信仰地名」であり、クルスとは本来無関係カ
＊クルスは流域に多いが、早い時代の開発が背景にあるかも（河道の「巡る州」とは不限）
＊本来「クリ・ス」か
＊栗田・栗野・栗原・栗崎・栗山・栗嶺・栗谷・栗瀬・栗出・栗祖・栗当・栗部・栗町・栗藤・栗源・栗屋・厨（栗屋田）・栗橋・栗坪・栗熊・久礼・来島等〃類似地名〃に留意

地名「峠」資料

出水地名研究会
62・8・22 江之口汎生

【1】「トウゲ」編年

康和年間 1100頃 ⇒《たうけ　》 ➡『堀川百首・雑二十首』中の「山」の項の最後１６首目
★足柄の山のタウケにけふきてそ富士の高根の程は知らるゝ

文治４年 1188 ⇒《任下》 ➡『旧記雑録・前編Ⅰ 62PNo126 』伊作郡外小野のうち
★……限南小桃崎并上毛夜木瀬任下塩道大卒田礼……

建久元年 1190 ⇒《当下御園》 ➡『神鳳抄』『神宮雑例集』に出るも遺称地不詳
★伊勢国多気郡のうち ┌現・和歌山有田市蕪坂

建仁元年 1201 ⇒《タウ下王子》➡『明月記』及び『熊野山御幸記』同年十月九日条
★『熊野山御幸記』は峠王子『熊野御幸記』（群類本）はカフウサカ下王子

〃 〃 〃 ⇒《塔下王子》 ➡『明月記』『熊野山御幸記』『熊野御幸記』同年十月九日条
★現・和歌山県下津町

承久以前 1220頃 ⇒《山のたうげ》➡『八雲御抄』
★……やまのたうげをばこやのふる道と云ふ ┌現・川内市楠元・白浜境

建長３年 1251 ⇒《山のたうけ》➡『入来院家文書 23PNo66＝入来院堺注文案』
★……西ハかきる一てうの江口、同からす山の……同うつきれ山のタウケ

文永２年 1265 ⇒《佐備塔毛》 ➡『入来院家文書 41PNo78＝渋谷善心譲状』 ◎遺称地不詳
★西限佐備塔毛谷之流お切湯河へ ☞美作国河曾郷内下森自上山宮西の四至

文永５年 1268 ⇒《久利尾当毛》➡『角川地名・京都562P栗尾峠の項』
★有頭郷 四至 限東久利尾当毛…… 現・北桑田郡京北町 標高四００米

正応５年 1292 ⇒《臼井到下》 ➡熊野皇太神社の銅鐘に「奉施入 臼井到下 今熊野大鐘事」
★古くは碓日（景行紀40年）碓氷、中世には臼井・笛吹の「坂」と表記

元亨２年 1322 ⇒《新塔下》 ➡『入来院家文書 33PNo73＝入来院内清敷南方水田検地帳』
★「久木宇津」分に加定四反 のうち<新塔下一反廿>

建武５年 1338 ⇒《洞塔下》 ➡『旧記雑録・前編Ⅰ713PNo2017＝入来院本田氏文書』
★……今月（七月）九日洞塔下後攻…… ◎遺称地不詳

建徳ゴロ 1370頃 ⇒《番場の当下》➡『太平記・九』
★番場の当下にて野伏に取籠られて……

応永34年 1427 ⇒《たう下》 ➡『熊野詣日記』ﾌﾂﾋ・ﾋ8ﾑめれさし58ｼ9・3-87ﾌ9ｴ
★和歌山県中辺路町 滝尻王子社付近

？？？？ ⇒《当下》 ➡『修明門院熊野御幸記』に「雄山の当下」ﾌﾂﾋ58・3-86ｳ1
★和歌山市 雄山は『日本後紀』延暦23年 804条に「自雄山道還日根行宮」

？？？？ ⇒《至下》 ➡『伊京集』
★「至下 ﾀｳｹﾞ 峯 峠同 手向 同 ﾀﾑｹ」

【2】「タワ・タヲ」編年

☞<多和> ＝『古事記・中』
☆「……益見畏みて、山の多和より御船を引き越して……」

元慶元年 877 ☞<多和神> ＝『三代実録』三月四日条
☆……授従五位下多和神従五位上

昌泰年間？ 900頃 ☞<太乎利> ＝『新撰字鏡』
☆「嶺 山乃三禰 太乎利」

延長年間？ 927 ☞<多和神社> ＝天長元年に空海が多和郷に勧請と伝う ◎┌大己貴命を祭祀
☆比定地には長尾町（全讃史）と志度町（讃岐国官社考証）の二説アリ

承平年間？ 935頃 ☞<多和郷> ＝『和名抄』寒川郡七郷の一 ◎現・香川県津田町
☆『刊本』は大知郷とするが誤りとされる

天仁２年 1109 ☞<多和> ＝『中右記』10月24日条に「過柚多和 大坂」
☆和歌山県中辺路町、大坂本王子付近

保安３年 1122 ☞<多和野> ＝『角川・大分523P右』
☆玖珠郡保足郷の四至 「限南 多和野少狩蔵……」

文治４年 1188 ☞<多尾> ＝『入来永利氏文書＝旧記・Ⅰ 62PNo126 』
☆伊作郡外小野の内 「北限 外小野北波多辺日置峯波多々尾上黒河戸渕」

嘉元４年 1306 ☞<タハ> ＝『田畠処分状＝角川・和歌山』
☆伊都郡相河荘河北の内／現・橋本市「相賀庄シャウブ谷タハノカキウチ」

元亨４年 1324 ☞<多尾> ＝『智覚系譜＝旧記・Ⅰ514PNo1390』
☆知覚院開聞中宮領白石狩倉域内 「西限布志ノ世多尾下ｮﾘ北ニ流ﾀﾙ野谷」

〃 〃 1324 ☞<多和> ＝『伊作家文書＝旧記・Ⅰ521PNo1403』
☆日置北～南郷堺 『……久留美野之大世多和……』

嘉暦元年 1326 ☞<多和> ＝『地頭職分文＝角川・島根』
☆石見那賀郡永安別府の内／現・弥栄ﾔｻｶ 村 「多和越熊毛……」

弘和３年 1383 ☞<田尾氏> 『角川・長崎』

文和３年 1354 ☞<タウノ薗>『清色亀鑑No74』☆東郷鳥丸村の内 ＊延文２1356文書にタヲ

応永13年 1406 ☞<タヲノ薗>『清色亀鑑No69』☆ 〃 〃 ＊別の1354年文書にタウノ薗

弘治元年 1555 ☞<多波目> 『角川・埼玉』 ☆坂戸市多和目or入間郡日高町田波目の内

天正17年 1569 ☞<タヲ> 『角川・長崎』 ☆旧弘岡村の枝村（現・春野町）中之村の内

天正末期 1590頃 ☞<多和田> 『角川・滋賀』 ☆坂田郡近江町の内

承保２年 1645 ☞<母祚多和> ＝『日本古代用水史の研究』赤穂郡「歩危上壱所」四至の西限

〃 〃 1645 ☞<大蔵多和気>＝ 〃 〃 〃（共に305P） 〃 「歩危下壱所」四至の北限

寛文４年 1665 ☞<田尾村> 『角川・宮崎』 ☆北諸県郡高城町の内

寛文５年 1666 ☞<田尾村> 『角川・長崎』 ☆上記「田尾氏」と同所

田尾原＝栗野町（元禄郷帳1690頃）／塔之原＝樋脇町（建長二年1250）

【3】「峠・タワ・タヲ」関係の参考文献

（右端は『地名関係文献解題事典』の掲載ページ）

峠に関する二三の考察	『太陽・一六－３』	明治44年	48P
タワといふ語	『岡山文化資料・二－５	昭和５年	452P
峠の語源に関する一考察	『山岳・二六－１』	６年	88P
峠の語源	『山岳・二六－１』	６年	129P
峠・坂・越え	『山と渓谷・51号』	13年	129P
峠雑感	『山と渓谷・51号』	13年	128P
手向考	『国語国文一二－11号』	17年	143P
トフとタヲ	『民間伝承・八－７』	18年	144P
峠の風景	『民間伝承・一三－２』	25年	160P
峠の地名	『地理学評論・二五－10』	27年	170P
峠随想	『あしなか・35号』	29年	176P
三増峠地名考	『北相文化・５号』	29年	182P
音羽（峠）	『地名学研究・１号』	32年	198P
古代碓氷坂考	『信濃・一〇－10号』	33年	211P
峠(ﾀｵ)の回想	『田布施地方史公誌・35号』	47年	325P
峠の信仰と文学	『地方史静岡・４号』	49年	359P
大峰の峠	『谿・１号』	50年	372P
峠の名前あれこれ	『山と渓谷・458 号』	51年	395P
峠そしてその語源を探る	『山と渓谷・458 号』	51年	395P
峠・乢・垰・越(ｺｴ)定義	『伊那・二四－２号』	51年	395P
峠をどう読むか	『日本語・一八－１』	53年	437P

地名の文献（鹿児島県）

鹿児島地名研究会
62・9・6　江之口汎生

☞ 『地名関係文献解題事典』（昭和56年２月同朋社・刊）を底本とした
☞ 各『市町村史』及び一部の機関誌（千台、大隅など）は未収録。これらは後で別に資料作成の予定
☞ 右端は『地名関係文献解題事典』の掲載ページ　　☞ 「＊」は本会員の小川氏の論文である

論文名	掲載誌・No	年度	P
古代地名考	学芸志林八ー47	明治13	13P
薩隅地名称院考	史学雑誌九ー８	31	28P
薩隅の地名	歴史地理・五ー10	36	34P
鹿児島の地名に就て	〃　〃　四六ー１	大正14	74P
日置部考	民族・二ー５	昭和２	82P
地域賤称について	旅と伝説・七ー８	9	109P
＊ 伊敷と甲突川	鹿児島史学３	32	196P
＊ 吾平	〃　〃　４	33	208P
＊ 加治木	〃　〃　５	33	209P
＊ 京塚	鹿児島民俗学会報20	33	210P
隼人乃湍門考	万葉29	33	214P
奄美雑感	奄美郷土研究会報２	34	217P
＊ 田布施と答志	地名学研究10/11 合併号	34	221P
＊ 宇都と鵜戸	地名学研究14	35	228P
＊ 指宿地方の地名	薩南民俗15	35	228P
＊ 青	地名学研究16	35	227P
＊ 熊毛の地名	種子島民俗11	35	229P
＊ 揖宿郡の地名（一）	薩南民俗16	36	235P
＊ 氏	地名学研究19/20 合併号	36	235P
＊ 熊毛の地名（二）	種子島民俗12	36	237P
西南諸島のキナ地名	日本民俗学会報24	37	247P
南島地名研究序説	奄美郷土研究会報４	37	247P
＊ 屋久島の名義	種子島民俗14	37	248P
＊ 南島の座という地名	種子島民俗15	38	254P
＊ 油久	種子島民俗15	38	255P
＊ 生見	民俗研究１	39	261P
＊ 揖宿地方の水に起因する地名	〃　〃　２	40	267P
名瀬付近の地名及び「天草」	奄美郷土研究会報６	39	261P
＊ 宝満神社と浦田神社	鹿児島民俗学会報九ー４	40	272P
＊ 斧（ヨキ）	種子島研究４	40	273P
＊ 馭謨郡	鹿児島民俗学会報42	41	278P
南島の地名	奄美郷土研究会報８	41	281P
＊ 丸という地名	民俗研究３	42	282P
隼人の近畿地方移配地について	日本歴史230	42	291P
＊ 籠という船着場	種子島研究10	43	291P
種子島「せい瀬」の由来	南島民俗２	43	297P
＊ 大口という地名	南島民俗11	44	302P
＊ 西之表	〃　〃　７	44	305P
＊ ミドリという地名	南九州郷土研究３	44	307P
＊ 青木	〃　〃　〃　４	45	311P
茶臼山目録	郷土研究二ー9・10・12	大正３	57P
〃　〃	郷土研究三ー4・5・6・8・11	4	57P
地形を表す地名	土俗と伝説一ー１・２	大正７	64P
連雀町	〃　〃　一ー４	8	66P
地形と地名	科学知識六ー７	昭和２	80P
地形に関係した地名の話	〃　〃　六ー５	2	80P
銭瓶塚由来記	旅と伝説二ー８	4	88P
洗足池考	旅と伝説三ー４	5	93P
新田・新開とその地名	地理教育二四ー１	11	116P
地名の訛り	文化三ー６	11	117P
車田採訪記	ひだびと五ー７	12	120P
田の呼び名	ひだぶと五ー９	12	121P
中世の接待所について	歴史地理六九ー２	12	122P
焼畑の諸問題	民間伝承三ー５	12	123P
荒神谷	旅と伝説一ー10	13	126P
佐渡の車田	ひだびと七ー７	14	131P
まま親と弦巻田	ひだびと一〇ー８	18	144P
中世のほまち田	ひだびと一〇ー６	17	144P
車田考	日本民俗のために７	23	157P
車田という地名	村落生活の研究一ー３	24	159P
九州の地名	人文地理二ー２	25	163P
津留名考	歴史と地理32	26	164P
崖を意味する地名	新地理一ー２	27	168P
前田の話	郷土志摩８	28	176P
葛と藤	民間伝承一九ー９	30	187P
日野郡の地名雑考	伯耆文化42	31	192P
葛神と藤神と	日本民俗学五ー１	32	199P
地名コホリとコホリヤマ	日本歴史106	32	202P
政所の歴史地理的研究	大分舞鶴高校クラブ	33	208P
弁天田その他	日本民俗学会報６ 231P=E	34	225P
佐目のはじまり	民俗文化13	39	259P

論文名	掲載誌・No	年度	P
＊ 一湊	南島民族19	昭和45	311P
牛屎の読み方について	南九州郷土研究10	45	312P
＊ 浦	民俗研究５	45	312P
ヤンゴの語源	奄美郷土研究会報11	45	318P
牛屎の地名考	南九州郷土研究11	46	321P
サツマという地名について	日本民俗学７４	46	323P
地名考	奄美郷土研究会報12	46	324P
＊ 北俣・南俣という地名	鹿児島民俗学会報54	47	332P
＊ 鵜の話	〃　〃　〃　55	47	333P
西之表校区における地名地番の動について	南島民俗26	47	338P
トカラの地名と民俗（上・下）	ボン書房	48	341P
地名考	奄美郷土研究会報14	48	347P
地名考	やどり24	48	347P
地名の蒐集（長島町一）	天草の民俗と伝承２	48	348P
平良における所の呼び方	人類科学25	48	348P
＊ 枕崎という地名	民俗研究６	48	350P
嘘於から曽於へ	地域研究四ー１	49	358P
高倉と祭場	日本民俗学92	49	359P
地名の蒐集（長島町二）	天草の民俗と伝承３	49	359P
奄美地名考	月刊百科158	50	371P
瀬戸内の地名	やどり33	50	375P
＊ 垂水について	鹿児島民俗 63・64合併号	50	375P
地名考	奄美郷土研究会報16	50	376P
沖永良部島地名考	和泊町公民館	50	381P
地名どくほん	南方文化研究所	51	383P
けしかり・花熟里の比定について	鹿児島中世史研究会報36	51	386P
衣評について	〃　〃　〃　〃	51	388P
神話の刻まれた地名群	鹿児島民俗 63・64合併号	51	391P
聖地高千穂峰の本家争い	歴史と旅三ー１	51	392P
地名の由来	奄美郷土文化１	51	394P
地名の由来とおもしろさ	〃　〃　２	51	394P
＊ 開聞岳の名称	英彦山と九州の修験道	52	400P
奄美大島考	奄美郷土研究会報17	52	405P
クビリの話	奄美郷土文化８	52	407P
ヤンゴーのこと	フォークロア５	53	442P
南島ノート	（春苑堂・刊）	54	440P
クヌギとよむ地名	カナノヒカリ 669	53	427P
地名と植物	ドルメン五ー５or６	14	132P
〃　〃	あしなか 138	48	347P
驢櫨の誤り	〃　〃　18	40	268P
高島町の鵜川地名考	〃　〃　16	40	269P
田の神の祭場	日本民俗学会報42	40	269P
鵜と地名	郷土志摩34	41	277P
鴨と高鴨と岡田の鴨	国語と国文学四三ー４	41	278P
志摩国香掛考	人文地理一八ー５	41	279P
荘園制の遺称	下野民俗６	42	288P
荘園制の遺称	栃木県地名研究６	42	289P
引田地名考	郷土白鳥 10・11/12/15	43	298P
塚墓の名称	古事類苑月報34	45	315P
畑という地名について	山口県地方史研究27	47	337P
山口県の地名（特牛）	〃　〃　〃　27	48	338P
鬼たちの足跡	歴史読本一八ー６	48	344P
信仰と地名	伊予の民俗２	48	345P
小地名としての川筋名の考察	日本民俗学90	48	346P
田の面積について	民俗文化 113	48	347P
地名ムタについて	日本民俗学85	48	348P
原及び野に関する地名的考察	駒沢地理９	48	350P
赤城ということば	上毛民俗43	49	355P
梅の木という地名について	歴史手帳二ー９	49	356P
かれ川語義	郷土白鳥20	50	373P
境部に関する若干の考察	日本歴史324	50	374P
新と古	日本語一五ー１	50	375P
ツルイ考	地方史研究二五ー６	50	377P
ツルの地名考	季刊アニマ１	50	377P
地名「千束」について	富田文化財９	50	379P
堀川百首名所考	跡見・短大研究紀要１３	51	397P
上代における道祖神の名称	万葉95	52	409P
引田の旧名	郷土白鳥23	52	413P
引田と刈田について	〃　〃　28	52	413P
布施屋に就て	旅と伝説五ー８	7	453P

地名「武元」考

出水地名研究会
62・8・22 江之口汎生

【1】武元は「竹元」か

（和泉郡「武元名主」渋谷十郎重元＝延元二年1337）

＜武本村　／　右ハ惣名ニて往古竹村と為申由、其後竹本と相唱……＞
『享保七年～・検地日誌』は「竹元」で統一　└『出水名勝志』
「武＝竹」なら「モト」の義は？
「松モト35」「栃モト10」「榎モト８」「楠モト５」「杉モト５」

【2】「モト」とは？

（『延喜式』の駅名、『和名抄』の郷名から）

坂本駅　相模・足上
美濃・恵那／坂本郷＝神坂
上野・碓氷／坂本郷／坂下駅
肥後・益城／坂本郷
越中・礪波

坂本郷（河内・古市）
河内・高安／坂本村

坂本郷　和泉・和泉
遠江・濱名／坂上駅
上總・埴生
陸奥・曰理
因幡・気多
讃岐・山田
讃岐・鵜足
讃岐・刈田

＊＊［『延喜式』『和名抄』とも「元」の用例はナシ］＊＊

【3】「タケ」考A

（武元は「嶽本」か？）

平岩部落の「竹之下」姓　（上宮嶽・上宮神社の直下で登山口）
御嶽　＜蔣魴曰　亦作岳　嶽山高名也　漢語抄云美太介＞『和名抄』
＜金峰山 ミタケ　大和国吉野郡七高山之一＞『色葉字類抄』

【4】紫尾信仰の周辺

（紫美神と御嶽［カ］、上宮嶽［カ］と熊野信仰）

紫美神　貞観８年と10年の授位（重複）　┌『明治神社誌料・下』
御嶽　古棟札＜明暦三年　奉建立金御嶽宝殿地頭諏訪甚左衛門…＞
御嶽信仰　＜大峯山を中心とする中央修験道に対し中世以降国御嶽を中心とする地方修験道の拠点が各地に生れた……＞
└『新版地方史辞典』
〃　〃　＜沖縄各地の御嶽はウタキと称し聖なる地とされているがこれは本土の杜信仰に相当するものといえる＞『民間信仰辞典』
（桜島＝下記参照　／　開聞岳＝『三国神社伝記6P右』
大峯山　＜修験の徒紫尾山を西州の大峯と号し＞『図会』
〃　〃　＜大峯山は奈良時代は金御嶽といわれ、地下は黄金の浄土であるという黄金伝承が生じていた……＞『日本の古代10』
☞川内市麦之浦「三嶽山」「三嶽尾」＝「竹下」／王子田・山王田
［永録(ママ)七年霜月四日御嶽山云々＝棟札／御嶽蔵王権現
嶽まいり　＜山上に権現社ありて、歳々三月四日に諸人群詣す……＞
└『甕藩名勝考』
〃　〃　＜肝属郡内之浦町では四月三日にミタケマイリといって若い男女が国見岳，黒園岳などに参りツツジの花を採ってくる＞
└『平凡社・世界大百科事典』
上宮嶽　＜他邑にては紫尾と称し出水にては上宮嶽と号す＞『図会』

熊野信仰　＜祁答院紫尾山熊野大権現社内　神主種子田讃岐守宗安……＞
＝弘安10年1287　└『宮之城名勝志調＝地誌備考所収』

【5】紫尾信仰の拡散

（紫尾山をめぐる信仰の残影）

小字　花立　＝出水大字・上鯖渕／野田上名／高尾野柴引／下高尾野／祁答院麓牟田
※華立石＝鶴田町神子（字知処）or東郷町藤川（伝・ハナイシ）
└『寺社巡詣録 47P左』
王子　＝阿久根波留　王子ノ下＝樋脇市比野
市王子・王子野・石王子・カシ木王子・王子ノ後＝鶴田紫尾
※花牟礼王子＜社殿距二里八町許建石祠於出水路山祀花牟礼王子施主無傳＞『寺社巡詣録 47P右』＝文明七年1475
＜出水往還花牟礼ノ石者文明中寄進也大檀那平千代松トアリ同所里塚者貞和年中寄進也……＞『祁答院記』
鳥居東＝出水武元　鳥居尻＝阿久根山下　鳥居ノ下＝鶴田紫尾
鳥井堂・鳥井ヶ原＝樋脇塔之原
御岳　＝高尾野大久保？
（遙拝所）野田町上り立
※華表　＝社の南八町／鶴田種子田／入来副田（紫尾山華表原）
└『寺社巡詣録 48P右』
紫尾田＝祁答院麓牟田・横川上ノ　紫尾ヶ迫＝東郷斧渕・南瀬
紫尾宮＝出水上知識　先達＝出水上鯖渕　紫尾田原＝横川上ノ
神社＝里宮　＝旧東郷田海1444　東郷鳥丸1480　*出水上知識1488
*宮之城二渡1562　東郷司野1578　東郷山田1586
*高尾野柴引1606　*宮城白尾川1625　東郷南瀬1641
*川内戸田1708　*宮之城須杭1714　*入来牟田々1725
（宮之城山崎麓）（上宮神社＝宮之城平川＝寛永頃）
☞＊は「再興」など年代不確定
その他＝　［町石・経塚・西の高野山・湯谷権現・徐副・串木野］
＝小字　竹下　川内麦之浦：三嶽山　竹下：鶴田神子
竹ノ下　入来浦之名：愛宕山　嶽山：野田上名
竹下・武元：高尾野高尾野　岳ダム：〃　〃

【6】「タケ」考B

（「武」は「嶽」か？）

本岳　旧伊集院・現郡山町：ジョウゴ山＝上宮嶽＝熊野神社
里岳　〃　〃　〃　〃：餅ヶ岡＝智賀尾神（熊野系）＝近岡神社
＊武元　国分市　：＜小河院　武元二丁＝図田帳＞城山の南下方
＊武　桜島町　：＜向嶋地頭之事并岳＝天文六年＞
☞御嶽蔵王権現＜横山村（桜島）神野にあり……＞『図会』
☞御嶽龍王権現＜松浦村（桜島）にあり……＞『図会』
＊武　鹿児島市：＜かこしまのこほりのうちたけのむら＝建徳三年＞
武田　加世田市：＜一　たけた＝永和10年＞
竹島　三島村　：『日本書紀』に出る／琉球竹が密生する『図会』
竹島　三島村　：断崖絶壁で霧島火山帯に属する　└タカシマとも
竹原町　出水市　：＜山門院内竹原町＝正和三年＞
竹山　山川町　：指宿カルデラ内の中央火口丘群の一

平田先生

資料

第18回例会

「植物に因んだ地名」

肥後芳尚

○ 鹿児島県地名の特徴

① 古代地名が残っている

② 古代地名には自然地名(地形地名)が多い

地形の特徴　　険しい　　特に姶良・阿多 西阿波 沒カルデラ 壁である
錦江湾 周辺の急崖.
シラス台地の侵食

例.　さくらじま.　かごしま.　さつま ……「日本の地名」松尾

地名　　呼び名に 勝手に漢字をあてている　表音で無意味な漢字
漢字とは 違った意味の場合が多い.
植物の名をあてているのが多い.
植物の地名には注意が必要

③ 山の地名

一般的傾向として 若者に郷土への関心が落ちている
山村地域では 若者の流失で 過疎、山村には年寄りのみ
林業不振・生活様式の変化で 山・森林との 結びつきが落らぐ

木材伐採.; 薪・落葉の採取も激減 又. 山遊び, 栗拾い, 柾実拾い,
むべとり, 門松伐り等で山に入ることは 殆んど無くなった.

年寄りも 体力の衰えで 山に入らない. 古老もボケで 物忘れが ひどい.

耳が遠く 聴取りも困難である.

山の地名　忘れられて行く

④ 方言と地名

鹿児島の方言は難しく、他所者には判らない. 方言地名は 外からの
地名研究を困難にしている.

研究は鹿児島に住んでいる われわれの手でやらざるを得ない.

植物名に学名, 和名, 方言名があるが　植物方言名が多い.

町村で違っている. 植物に因んだ地名の理解を益々困難にしている.

例

イヌビワ（くわ科）	
イタブ	宝島
イタビノキ	東串良町（柏原）
イチャヒヤ	枕永良部島（知名）
イチャビ	徳之島（母間）
イチャビギイ	徳之島
イチャビギク	徳之島
イチャビグウィ	徳之島（三京）
イチャブ	大島（古仁屋）
インタッ	加世田市
インタブ	長島（指江）
ウタッノッ	東串良町（柏原）
カータッ	高山町
カラタブ	甑島
カワタッ	知覧町, 内之浦町, 高山町
カワタビ	国分市（敷根）, 垂水市（牛根, 大野原）
カワタブ	鹿児島市, 内之浦町, 高山町, 佐多町（大泊）
クイタブ	屋久島
ククチ	金峰町（田布施）
ククツ	山川町, 加世田市, 吹上町
ククビ	屋久島（永田）
クルッサダイ	徳之島（阿地）
コーバタイッチン	徳之島（天城）
コタッ	鹿児島市（伊敷, 皆与志）, 加世田市（内山田）, 笠沙町（椎木）, 川辺町（永田）, 吹上町, 市来町（養母）, 宮之城町, 大口市, 吉松町
コタッツブノキ	吹上町
コタビ	硫黄島
コクブ	出水市, 大口市
タッ	市来町
タッノキ	屋久島（永田）
タッノッ	市来町（大里）, 吹上町, 鹿屋市, 高山町
タッノミ	高山町
タビ	鹿児島市, 桜島（持木, 古里）, 屋久島（宮之浦）
タビノキ	垂水市（七ツ谷）
タブ	加世田市（万世, 小松原）, 垂水市（垂水, 牛根）, 佐多町（大泊）, 屋久島（安房, 尾之間, 栗生, 永田, 小瀬田）, 中之島
タブノキ	開聞町, 屋久島（安房, 尾之間, 栗生, 吉田）
チチコッブ	加世田市（津貫）
チッパ	大島
チャッビ	枕永良部島（皆川）
チャチブトウ	与論島（城）
ナッチョビ	西表島
ハゲタブ	屋久島（小島）
ビンゴヒー	喜界島（川嶽）
フィタブ	屋久島（宮之浦）
マータン	枕永良部島
マーチャン	徳之島（兼久, 犬田布）
マーチャンギイ	徳之島
マーチャング゛ィイ	徳之島（三京, 阿地）
マイチャン	徳之島（亀津）
マッチャング゛ィイ	徳之島（三京）
マンチャン	徳之島（伊仙, 東阿三）
マンチュン	徳之島（阿地）
ミイソビ	大島
ミックラチャップ	枕永良部島（内城）
ミンコ	徳之島（徳和瀬）
ミンコキ	枕永良部島
ミンコギ	名瀬市, 徳之島（徳和瀬）
ムシブチ	大島
ヤマイチャビ	徳之島（母間）
イヌマキ（いぬまき科）	
イキャーギ	大島（瀬戸内）
イヌヒトッパ	枕永良部島（和泊）
キャアギ	徳之島（亀津, 犬田布, 阿地）, 枕永良部島
キャーキ	徳之島（岡前）
キャーギ	大島（与路島）
キャーギイ	徳之島（天城）
シャーギ	与論島
シャガ	与論島
ダカンゾ	志布志町
ダクッシゾ	加世田市（津貫）
ダゴイ	加世田市（武田）
ダゴジュイノキ	吹上町, 金峰町
ダゴンノキ	坊津町
ダンゴロノッ	加世田市, 吹上町, 日吉町
ニンギヨミノッ	笠沙町, 吹上町
ニンギョンミノッ	高山町
ヒトウッパ	喜界島
ヒトッパ	全県
ヒトッパノキ	屋久島（一湊）
ヒャーギ	枕永良部島（和泊）
ビトウッパ	喜界島（先内）
マーキ	徳之島（松原）
マーキィ	徳之島（天城）
マークッイ	徳之島（亀津, 母間）
マキ	薩刈町（本城）, 徳之島, 大島
マキイキ	大島（大和）
ヤマヒトッパ	竜爽

昭55. 鹿児島県植物方言集より

○ 自然地名研究

まず　現場を見よ　と云われるが　その場所を知っている人が少ないので
案内を頼めない.　また, 信頼できる字図が少ない

対策.　地形図に字図をはめこむ 作業が急がれなければならない。

表-1. 植物に因んだ地名の参考資料

書名	著者	発行
1. 樹木和名考	白井 光太郎 著	
2. 樹木大図説（I.II.III巻）	上原 敬二 著（昭 ）	有明書房
3. 災害と植物地名	小川 豊 著（昭62）	山海堂
鹿児島県関係		
1. 鹿児島民俗植物記	内藤 喬 著（昭39）	
2. 鹿児島県植物方言集	初島 住彦 編（昭55）	県立博物館
3. 樹木と方言	倉田 悟 著（昭37）	地球出版
4. 続樹木と方言	〃 （昭42）	〃
5. 植物と民俗	〃 （昭 ）	〃
6. 角川日本地名大辞典（鹿児島県）	角川書店 編（昭58）	角川書店

表-2 植物に因んだ小字名の数（6町）

町名	大字数	小字数	面積	世帯数	世帯人員	1小字平均面積	植物名字数	比率
			Km²			ha		%
知覧	8	2,284	120.37	5,253	14,721	5.27	248	10.9
日吉	4	683	29.17	2,517	6,807	4.27	81	11.9
給良	19	1,315	102.92	11,850	35,278	7.69	110	8.4
牧園	7	979	129.48	4,164	11,195	13.22	122	12.5
末吉	5	1,917	129.46	7,469	21,173	6.75	225	11.7
根占	6	1,331	89.61	2,743	8,213	6.73	129	9.7
計	49	8,509	601.01	33,996	97,387	43.53	916	
平均	8	1,418	100.17	5,666	16,231	7.32	153	10.7

参考

植物地名例 「クリ」 小川 豊著 『災害と植物地名』から

クリ（栗）

（一）「和名抄」の地名のなかに 讃岐国鵜足郡栗隈郷（クリクマ）
阿波国麻植郡吳島郷（クレシマ）

（二）「岩波古語辞典」のクリをみれば

① くり（栗）ブナ科の落葉喬木の一。古くは「くる」といった。

② くり（湟）〈クロ（黒）と同根〉水中の黒い土。染料とする。

③ く・り（刳り）えぐる。

④ く・り（繰り・絡り）糸など細長いものを手元に引いて寄せる。たぐる。

（三） クリ・クレは同義の場合が地名には多いとみる。すなわち、地形が同じようなところが多く、クセも同じものがみられる。クレの義の説は

① 吳（クレ）、三世紀ごろ揚子江の南にあった吳（コウ）の国の人の帰化地説

② 塊、カタマリ、土樗（つちくれ）説。

③ 樗（くれ）、皮のついたままの材木説。

④ 暗れ、暮れ、眩れ、暗くなる、夕方になる、くらがり説。

などである

（四） クリ地名の地形は、山陰のところであったり、午後になると暗いところであったり、さらには崩壊性地形であったりする。

（五） クレ地名の地形は地すべり、あるいは崩壊がある土地で、小規模な場合でもバラバラと土樗が落ちてくるところ。いわゆる、地すべり・崩壊などの抉（えぐ）るところ。

（六） 鵜足郡栗隈郷は、古代からの土器川氾濫河道時代に何度も河道の変せんをたどり地名のみが往古の地形を伝えているところ。現在は栗能。

（七） クレ地名の地形は道路管理上神経を使うところである。クレ坂などは蛇行線形でしかも小石や土砂がバラバラと崩落するのでガードが欲しいところ。

（八） 川沿いのクレはクリの古形。古くはクルで、河川の蛇行地形（曲流）を意味する。

（九） クリ・クレは崩（クレ）、刳（クリ）で、大なり小なりの地すべり崩壊地で土砂の害のあるところ。
地形は曲がる（クル）で、川も道路も曲線形か、崩れやすい地形。

芝生説・クリの木の自生地説もある。

表-3　木本

	植物名 / 市町	松	竹・篠	笹	梅	桜	桃	栗	柿	梨	柳	桑	柞	梶	樗木	楠	椎	柾	榕	榎	柊木	柏	琵琶	赤木	白木	青木	黒木	一ツ葉	杉	桧	桐	小計
1	鹿児島市	90	20	13	13	13	13	7	18	1	21	13	7	1		12	5		2	13	8	4	4		7	4	4		8	2	3	306
2	大口市	30	4	1	5	1	1	2		1	9	3		2			1		2	3	1				1	2			4			73
3	出水市	39	4	7	2	5		1	1	4	10	4	2	1	1	6	4		2	1			2	5	1		2		6			110
4	阿久根市	26	2	1		1	2			2		4	5			2	1	4	3	2	1	2			5						1	64
5	川内市	33	8		8	3		5	5	3	4	1	3			5	4		1	5	2	4	1		1	2			8			106
6	串木野市	13	2		4	1		1	1	2	3	1	1			5	2	3	1	1		1	1		6							49
7	加世田市	32	10		6	3	2	1	8	2	4	3	1	3	2	7	3		4	3				1					4		1	100
8	枕崎市	23	1	1	3	5	0	2	2	1	1	5	2	1			1			1		1				1	2		2			55
9	指宿市	22	4	3	1	0	1		4	2	9	1	5	1		2	0		2	3						3	1					64
10	国分市	30	7	0	4	3	1	1	3	5	6	4	1			1	2			1	1	1									1	72
11	垂水市	30	4	1	3	1	2		2	1	11	7	3	6		4	3	2		1	1	3				1	2		1			89
12	鹿屋市	18	6	1	2	2	1		1		8	1	2	2	1	2				8	4	1	2		1	2	1	1	5			72
13	西之表市	76	11	8	3	5	2	6			6	7	4	1		1	5	1	5	2		1		2	1			3	1	1		152
	計	462	83	36	54	43	25	26	45	24	92	54	36	18	4	47	31	10	22	44	18	18	10	8	23	15	12	4	39	3	6	1312
1	知覇町	62	26	1	8	7	1	1	5		5	5	19	1		2			1	5		3	3	1	2	3	4	5	7		4	175
2	日吉町	23	3		4	1			4	4	2	1	4		2	1				1			2			3			2	1		58
3	姶良町	21	4	2	2	9	1		2		6	3	3	2		4	1	1	5	6	1	2			2	4			1		1	83
4	牧園町	27	3	2	5	7	3		5	2	2	10	1	2		1	1			5	3		1									80
5	末吉町	38	19		8	11		1	5		12	10	7			7	2			4	1	1	4				1		7	1	3	142
6	根占町	19	11		2	4	6	1	6		12	6	3	2		2	2	1	1	4			4		2	1			1			88
	計	190	60	5	29	39	11	3	27	6	39	33	37	7	2	17	6	2	7	25	5	6	14	1	6	11	5	5	18	2	8	626

小字名の種類　松 324、竹・篠 78、笹 31、梅 40、桜 47、桃 20、栗 18、柿 48、梨 17、柳 50、桑 53、柞 57

梶 22、樗木 5、楠 39、椎 32、柾 12、榕 22、榎 29、柊木 16、柏(アカメガシワ) 14、枇杷・琵琶 10、赤木 7

白木 23、青木 14、黒木 14、杉 37、一ツ葉 7、桧 4、桐 12

		椰木(ヤシ)	榧(カヤ)	茅ノ木(カヤノキ)	ヒバ(アテノキ)	イチョウ	桜(ケヤキ)	月ノ木(ツキノキ)	櫟(イチイガシ)	柿(カキ)	楢(ナラ)	保佐(ホサ)(コナラ)	朴(ホウ)	ニレ	エゴノ木	椅(ウルシ)	チシヤ	多羅ノキ(タラノキ)多羅維	長葉(ナガバ)(バウバツ)	高梁(コーカリャン)(モロコシ)	桂(カツラ)	桂ハ(ケイハ)(ニッケイ)	樺ノ木	椋ノ木(ムクノキ)	椿(セン)	角木	ソンノ木	スダノキ(イタジイ)	苦木(ニガキ)	モガセ(ホルトノキ)	小計
1	鹿児島市				1	1						1		2	1	1	3	1			1					1		1			14
2	大口市		1						1		1								1												4
3	出水市		1							1						1						3	1								7
4	阿久根市												2				1		1		1						2				7
5	川内市				1				1					1				1		2	3								2		11
6	串木野市	1								1		2																	3		7
7	加世田市								3						3			2							1			1	3	2	15
8	枕崎市	2					1			3						2		1							1						10
9	指宿市																	4													4
10	国分市							1					2	1										1							5
11	垂水市			3	1						2										1				1						8
12	鹿屋市																														
13	西之表市						1				2										1										4
	計	3	2	3	3	1	2	1	5	5	5	3	4	4	4	4	4	9	2	2	7	3	1	1	3	1	2	2	8	2	96
1	知覧町	3							3		5											1						1			13
2	日吉町																1														1
3	姶良町												1			2															3
4	牧園町								1		3					1															5
5	末吉町												7				3														10
6	根占町																														
	計	3							4		8		8			3	4					1						1			32

椰木 4, 榧木 2, 茅木 2, ヒバ(アテノキ) 3, イチョウ 1, 桜(ケヤキ) 2, 月木(ツキノキ) 1, 櫟 8, 柿 4, 楢 11, ホサ(コナラ) 3, 朴 4, ニレ 2,

エゴノキ 4, 椅 7, チシヤ 6, タラノキ 7, 長葉 2, 高粱 2, 桂 6, 桂ハ(ニッケイ) 3, 樺木 1, ムクノキ 1, 椿 3, 角木 1,

ソンノキ 2, スダノキ 1, ニガキ 5, ホルトノキ 1,

		椿	花ノ木	榊	椛(カエデ)	橘	柚	玄花	密柑	茶	棕梠	グミノ木	ヤンニチ	油木(アブラギリ)	広木	春木	ハチ木	姉木	甘木	塗木(スルデ)	駄木(ニワトコ)	門木(ムクゲ)	單木(ヌルデ)	小桑(カゴノキ)	葵	芳木	伏木	小計		合計
1	鹿児島市	3			1	1	2					1	1												1			10		330
2	大口市			1	1							1																3		80
3	出水市									2				1		1												4		121
4	阿久根市									1						1										1		3		74
5	川内市	1	3							1											1	1						7		124
6	串木野市	2									1	1																4		60
7	加世田市	1	1			1	1			1	1	1																7		122
8	枕崎市		1																									1		66
9	指宿市				1																							1		69
10	国分市										1																	1		78
11	垂水市							1	1	2					1		1	1	1									8		105
12	鹿屋市	2					1			1																		4		76
13	西之表市	1	2							3																		6		162
	計	10	7	1	3	2	4	1	1	11	3	4	1	1	1	2	1	1	1		1	1			1	1		59		1467
1	知覇町	1	2				1			1				1						3			1	1				11		199
2	日吉町																													59
3	姶良町						1			1																	1	3		89
4	牧園町																					1						1		86
5	末吉町	2					3			2													1					8		160
6	根占町	3	4							3												1						11		99
	計	6	6				5			7				1						3		2	2	1			1	34		692

椿 12, 花木(ヒサカキ) 7, 榊 1, 椛 3, 橘 2, 柚 9, 玄花 1, 密柑 1, 茶 9, 棕梠 3, グミノ木 2, ヤンニチ 1, 油木 2,

広木 1, 春木 2, ハチ木 1, 姉木 1, 甘木 1, 塗木 3, 駄木 1, 門木 2, 單木 2, 小桑 1, 葵 1, 芳木 1, 伏木 1,

表-3　草本

		芦アシ	蒲ガマ	菌キ	荻オギ	菱ヒシ	芹セリ	茅カヤ	薄スキ	菅スゲ	萩ハギ	路フキ	蓴イラクサ麻	律ムクラ	市後イチゴ	菖蒲ショウブ	花ハナ	之シバサ	葛クズ・カズラ	葛ツタ	藤フジ	萆ヘゴ	蕨ワラビ	稲野稲・米	麦	稗ヒエ	粟	大豆	大角豆サササゲ	小豆	小計
1	鹿児島市	3	2		2		2	1	1		7		1			10		5	4	2	6	2			3	4		1			56
2	大口市				1			1			3					1		1			1										8
3	出水市	1						1			7					1		1	2			1			1	1					16
4	阿久根市						1		1		1							1	2		4	3	1	1	1	1					17
5	川内市	1		3			2	1			5					3			1			5	3		5				1		30
6	串木野市										2	1				1					2	1			1						8
7	加世田市	1		1				1			1					3		1	5		1	4	1		2	1				3	25
8	枕崎市																	1								2					3
9	指宿市										5										1		1			3				1	11
10	国分市	2							1		3		1			2		1			2							1			13
11	垂水市		1					2			3					2		2	4	1	2									1	18
12	鹿屋市							2								2							1	1	1						7
13	西之表市	1		4				1			5					1		1	1				9	2	3						28
	計	9	3	8	3		5	10	3		42	1	2			26		14	19	3	19	16	16	4	17	12		2	1	5	240
1	知覇町			1						3	1					2	3	2		3	7	2					2				26
2	日吉町	1				2					4			1		1					3										12
3	姶良町						1		1		4		1			3					1				1						12
4	牧園町	7									2				2	1	1	4	2		5			1							25
5	末吉町						2				2					1	3	1	6		2		3	3	1			1			25
6	根占町															1	1	1	3		2		1	1					2		12
	計	8		1		2	3		1	3	13		1	1	2	9	8	8	11	3	20	2	4	5	2		2	1	2		112

小字名の種類　芦14　蒲3，菌5　荻3，菱2，芹6　茅9，薄4，菅3，萩34，蓴1，イラクサ2，律1，市後2，菖蒲17，花8，芝12，

葛・カズラ26，葛6，藤25，萆14，蕨16，稲野稲・米9，麦16，稗9，粟2，大豆3，大角豆1，小豆5，芋19，茗荷5

菜1，胡麻13，麻8，煙草1，瓢箪2，芭蕉2，胡椒1，唐キビ1，栗種子1，

表-3

		芋	茗荷(ミョウガ)	菜(ナ)	胡麻(ゴマ)	麻	煙草	瓢箪(ヒョウタン)	芭蕉(バショウ)	胡椒(コショウ)	唐黍(トウキビ)	菜種(ナタネ)	小計	合計
1	鹿児島市	8	1		4		1			11			15	71
2	大口市													8
3	出水市		1		1				3		1		6	22
4	阿久根市	1		1									2	19
5	川内市	4	1						1				6	36
6	串木野市	1			3								4	12
7	加世田市	1				4							5	30
8	枕崎市				1								1	4
9	指宿市				3								3	14
10	国分市	1			1								2	15
11	垂水市	1			2							1	4	22
12	鹿屋市	1											1	8
13	西之表市													28
	計	18	3	1	15	4	1		4	1	1	1	49	289
1	知覇町					1		2					3	29
2	日吉町	1				1							2	14
3	姶良町	1				1							2	14
4	牧園町	1	2		2								5	30
5	末吉町	6			3								9	34
6	根占町	1				2							3	15
	計	10	2		5	5		2					24	136

和名の判らない植物（地名）

○鹿児島市　羽山，相木，有木，フノキ，角ノ木，奄(アン)木迫，広木

○阿久根市　荒木，小早田木，摺木，芳木ノ上，ナゲキ

○大口市　釣芝，木洲平，針木，槌(ゲシ)ヶ丸，宇津木(ウツギ?)
早木田，奴ルキ，糀山，

○出水市　猪木迫，春木，門木(ムクゲ?)

○指宿市　赤生木(アコウ?)，柿ヶ鼻

○串木野市　厚木，葉山

○国分市　籔ヶ谷，イラガ谷(イラクサ?)

○加世田市　母女木，椋木迫

○川内市　荏蓮(メレン)木　供木迫(クスギサコ?)　草木山(クサギヤマ)

○枕崎市　埜木の角

○知覇町　高糸木，井手桎，柴山，厚木穴，久志木ヶ比良，果木ヶ迫(スルデ?)
珍ヶ迫，クノ木ノ尾，

○日吉町　宇都木，斜木，樗木(コウゾ?)

○姶良町　仁礼木，伏木

○牧園町　間手ヶ迫

○末吉町　樫木(カシノキ?)，町木ヶ岳，栁木，鐙木，羽根木，堂目木
鶴木，ケシガ早田

○根占町　久木迫，安之木

◎お願い　植物の方名を調べましたが決めかねています
ご教示いただければ幸いです。

〒899-43　国分市中央1-5-15　肥後芳尚

自序に代えて

植物の「方名」について

内藤喬

植物の名には動物と同様に、一国全体に通用する「普通名」―我国では「和名」（わめい）―と世界共通の学問上の名「学名」（がくめい）とがあり、その他に今一つ、ここに云う「方名」（ほうめい）がある。

「方名」と云うのは、地方名の省略で、その地方、その村での名と云う意味である。村々の風俗や、民謡などと同じように、その土地に住む人々の間に自然に発生したものであつて、其処には命名者などと云う者もない、全く庶民の間に、何時とはなしに、誰云うとなく、云いつぎ語りつがれて、今日に及んだものである。私は「方名」こそは、私共の遠い祖先から伝えられた文化の遺産だと思つている。現在用いられている「和名」は、学者が命名したのも多いが、実は「方名」から来ているものがずいぶんと多いのである。

三月のお節句の草餅に必ず使う「ヨモギ」は和名であるが、九州地方ではむしろ方名の「フツ」で一般に呼ばれている。五月のお節供に、サンドウィッチのように団子を包む和名「サルトリイバラ」は鹿児島地方では専ら「クックッランハ」と呼んでいる。処が海を越えて屋久島に行くと、和名と同じ方名「サルトリイバラ」が島人の間に通用している。それが北九州の博多地方に行くと「ガメノハ」の方名で呼んでいる。また同じ鹿児島県内でも所によつてずい分異つた方名が多い。中には同一町村内でも、全く異つた方名で伝承されているものもあるので、調査することになると際限がないわけである。

私は方名に接すると、私共の祖先が植物に対して抱いていた限りない愛情を知ることが出来、そのあたたかい祖先の言葉をじかに聞く思がして、何とも云えない親しさや懐しさに没つてくる。私はその方名をとおして、祖先のつつましい生活や、ゆたかな思想に相触れるように思う。事実、方名はその植物と人生との関連に基くもの、即ち用途などから、或は少年少女の遊びなどから、巧みにその特徴や性質をとらえて名付けられたものが多く、偶々それを聞くと、つい、ほおえましさを禁じ得ないのである。

私が方名に興味を覚えはじめたのは大正の頃だつたから、もうずいぶんと古い。勿論、之にかかり切つて調べたのではなく、所用を帯びて出かけた途次など、折にふれてはその土地の人々から聞き出し、或は土地の人々の会話に耳傾けつつ、その間から書きとめるようにしていたもので、年月の長い割には、いかにも非能率的であつたわけである。そして其処には有難いことに、友人や学生諸君の協力も、大いに与つているのである。友人や学生諸君から聞いたのは、方名と対照するように一々実物標本を添えて提出してもらつたものであることを断つておきたい。

私は、こうして多くの方名を見て、何か地方的に一連のつながりが濃厚に推知されることや、その中には新しいと思われるものもあるにはあるが、また時には、古い奈良朝時代に使われていた名が、そのまま現在に及んでいると思われる貴重なものもあつて、わが古代語が、以外な所に温存されているのに、驚き且つ喜ぶと共に、何かしら、ふくいくとした感懐に浸ることも一再ではなかつた。

思えば鹿児島県は、中央文化から遠ざかつているだけ、不便もあるが、同時にまた、その影響をひどく受けないで、昔の珠玉さながらに、よく保存されて来たと云う点も見のがせないことだと思う。

全く鹿児島県の方名は、その種類に於てもその量に於ても、実にすばらしいもので、云わば、方名の宝庫として大に誇つていいのである。

積極的に、もつと調査に乗り出したら、まだいくらでも蒐集出来ると思う。ところが、最近のようなきびしい、目まぐるしいほどの時勢に於て、この方名は次第に煙滅の傾向にあることは、どうも否めないようである。古い伝統や慣習を、大切に守つてくれて来た老人達の相次ぐ死亡は、同時に、古い言葉の滅亡を意味している。老人達に守られて育つた少年少女達の間に老人達の言葉が、しみ込んでいようとは云え、彼等が中年になつて生活苦と斗う頃にはやがて忘れられてしまうのではあるまいか。私はそれを遺憾に思つている一人である。

（鹿児島県植物方名集より抄録）

92　イヌシデ　（かばのき科）
　アオゾヤ　高山町
　ソヤ　大口市，垂水市（垂水，牛根）
　ソヤノキ　垂水市，（垂水，牛根）

93　イヌタデ　（たで科）
　アカノママ　隼人町
　アカノマンマ　鹿屋市，高山町
　アカマンマ　姶良町（帖佐）
　イカリソウ　徳之島（伊仙）
　コショグサ　大島
　サデ　大島（笠利）
　サデー　大島（笠利）
　サデクサ　沖永良部島
　タデ　全県
　タデーイ　喜界島
　タデイ　徳之島，沖永良部島，与論島
　ダレ　徳之島（亀徳）

94　イヌツゲ　（もちのき科）
　インツゲ　大口市，内之浦町，高山町，吾平町
　ヤマツゲ　垂水市（垂水，牛根），田代町

95　イヌビユ　（ひゆ科）
　イソビーヤー　喜界島
　インビヤー　喜界島
　シーナクサ　徳之島（母間）
　テイダナ　大島（笠利）
　ヒーニヤー　喜界島
　ビーニヤ　喜界島
　ピーニヤー　喜界島
　ヒンニヤ　沖永良部島（和泊）
　ビンニヤ　沖永良部島（和泊）
　ムクラグサ　大島（笠利）
　ヤマトウフィーヤ　喜界島

96　イヌビエ類　（いね科）
　ウチドイマイ　与論島
　ガラシイマイ　与論島
　ニイークサ　大島
　ヒー　喜界島
　ヒエ　加世田市，金峰町，吹上町，内之浦町，高山町，吾平町，
　ヒエクサ　垂水市
　ピー　喜界島
　ピークサ　大島
　フィ　大島，喜界島，徳之島

97　イヌビワ　（くわ科）
　イタブ　宝島
　イタビノキ　東串良町（柏原）
　イチャヒヤ　沖永良部島（知名）
　イチャビ　徳之島（母間）
　イチャビギイ　徳之島
　イチャビギク　徳之島
　イチャビグウィ　徳之島（三京）
　イチャブ　大島（古仁屋）
　インタッ　加世田市
　インタブ　長島（指江）
　ウタッノッ　東串良町（柏原）
　カータッ　高山町
　カラタブ　甑島
　カワタッ　知覧町，内之浦町，高山町
　カワタビ　国分市（敷根），垂水市（垂水，牛根，大野原）
　カワタブ　鹿児島市，内之浦町，高山町，佐多町（大迫）
　クイタブ　屋久島
　クタチ　金峰町（田布施）
　クタツ　山川町，加世田市，吹上町
　クタビ　屋久島（永田）
　クルッサダイ　徳之島（河地）
　コーバタイッチン　徳之島（天城）
　コタッ　鹿児島市（伊敷，皆与志），加世田市（内山田），
　　笠沙町（椎木），川辺町（永田），吹上町，
　　市来町（養母），宮之城町，大口市，吉松町
　コタッツプノキ　吹上町
　コタビ　硫黄島
　コタブ　出水市，大口市
　タッ　市来町
　タッノキ　屋久島（永田）
　タッノッ　市来町（大里），吹上町，鹿屋市，高山町
　タッノミ　高山町
　タビ　鹿児島市，桜島（持木，古里），屋久島（宮之浦）
　タビノキ　垂水市（七ツ谷）
　タブ　加世田市（万世，小松原），垂水市（垂水，牛根），佐多町（大泊）
　　屋久島（安房，尾之間，栗生，永田，小瀬田），中之島
　タブノキ　開聞町，屋久島（安房，尾之間，栗生，吉田）
　チチコップ　加世田市（津貫）
　チッパ　大島
　チャッピ　沖永良部島（皆川）
　チャチブトウ　与論島（城）
　ナッチョビ　諏訪之瀬島
　ハゲタブ　屋久島（小島）
　ビンゴヒー　喜界島（川嶺）
　フィタブ　屋久島（宮之浦）
　マータン　沖永良部島
　マーチャン　徳之島（兼久，犬田布）

　マーチャンギイ　徳之島
　マーチャングゥイ　徳之島（三京，河地）
　マイチャン　徳之島（亀津）
　マッチャングゥイ　徳之島（三京）
　マンチャン　徳之島（伊仙，東阿三）
　マンチュン　徳之島（河地）
　ミイソビ　大島
　ミックラチャップ　沖永良部島（内城）
　ミンコ　徳之島（徳和瀬）
　ミンコキ　沖永良部島
　ミンコギ　名瀬市，徳之島（徳和瀬）
　ムシブテ　大島
　ヤマイチャビ　徳之島（母間）

98　イヌホウズキ　（なす科）
　イヌフズキ　大口市
　インフズッ　有明町（野井倉）
　ドクナリ　徳之島（伊仙）
　ブタックワ　徳之島
　ホオズキ　大島

99　イヌマキ　（いぬまき科）
　イキャーギ　大島（瀬戸内）
　イヌヒトッバ　沖永良部島（和泊）
　キャアギ　徳之島（亀津，犬田布，河地），沖永良部島
　キャーキ　徳之島（岡前）
　キャーギ　大島（与路島）
　キャーギイ　徳之島（天城）
　シャーギ　与論島
　シャガ　与論島
　ダカンヅ　志布志町
　ダクゥンヅ　加世田市（津貫）
　ダゴイ　加世田市（武田）
　ダゴジュイノキ　吹上町，金峰町
　ダゴンノキ　坊津町
　ダンゴロノッ　加世田市，吹上町，日吉町
　ニンギヨミノッ　笠沙町，吹上町
　ニンギョンミノッ　高山町
　ヒトウッバ　喜界島
　ヒトッバ　全県
　ヒトッバノキ　屋久島（一湊）
　ヒャーギ　沖永良部島（和泊）
　ピトウッバ　喜界島（先内）
　マーキ　徳之島（松原）
　マーキィ　徳之島（天城）
　マークゥイ　徳之島（亀津，母間）
　マキ　菱刈町（本城），徳之島，大島
　マキイキ　大島（大和）
　ヤマヒトッバ　奄美

100　イヌメヒシバ　（いね科）
　（メヒシバ類参照）

101　イネ　（いね科）
　イニ　大島（瀬戸内），徳之島，沖永良部島，与論島
　イニー　喜界島（先内），徳之島（伊仙，河地）
　イネー　徳之島（兼久）
　イネイ　徳之島，与論島
　クミ　大島，与論島
　クム　大島，与論島
　シネ　与論島
　ジコメ　大島
　ジュコ　徳之島
　ジュコー　徳之島
　ニイ　大島，喜界島
　ニヤ　沖永良部島
　マイ　与論島

102　イノコズチ　（ひゆ科）
　（ハチジョウイノコズチを含む）
　ゲンコッグサ　吹上町
　サイ　加世田市，日吉町，吹上町，金峰町
　サシ　加世田市，大口市，串良町，高山町，大島，沖永良部島（高城）
　サバ　坊津町
　ジサン　大島
　シマアイ　与論島（城）
　フーシビ　徳之島（伊仙）
　マキシダンセ　喜界島（志戸桶）
　ミソナ　徳之島（河地）
　ムシナ　大島（嘉鉄），沖永良部島（内城，仁志）
　ムシナー　大島（嘉鉄），喜界島
　ムシニヤ　沖永良部島（和泊）
　ムセナ　宝島
　ヤマトゥチンカミ　徳之島（徳和瀬）

103　イノデ　（おしだ科）
　ゼンベヘゴ　垂水市（七ツ谷）

104　イノンド　（せり科）
　セイバンウイチョ　沖永良部島
　ニンジングサ　甑島
　ヤンバルウイチョ　沖永良部島

105　イブキシダ　（わらび科）
　ガンガンワクラベ　根占町（辺田）

106　イボタクサギ　（くまつづら科）
　ガジャンギ　大島（笠利）

	植物名 / 市町	松	竹・篠	笹	梅	桜	桃	栗	柿	梨	柳	桑	椚	梶	樗木	楠	椎	柾	榊	榎	柊木	柏	枇杷	赤木	白木	青木	黒木	一ッ葉	杉	桧	桐
1	鹿児島市	90	20	13	13	13	13	7	18	1	21	13	7	1	0	12	5	0	2	13	8	4	4	0	7	4	4	0	8	2	3
2	大口市	30	4	1	5	1	1	2	0	1	9	3	0	2	0	0	1	0	2	3	1	0	0	0	1	2	0	0	4	0	0
3	出水市	39	4	7	2	5	0	1	1	4	10	4	2	1	1	6	4	0	2	1	0	0	2	5	1	0	2	0	6	0	0
4	阿久根市	26	2	1	0	1	2	0	0	2	0	4	5	0	0	2	1	4	3	2	1	2	0	0	5	0	0	0	0	0	1
5	川内市	33	8	0	8	3	0	5	5	3	4	1	3	0	0	5	4	0	1	5	2	4	1	0	1	2	0	0	8	0	0
6	串木野市	13	2	0	4	1	0	1	1	2	3	1	1	0	0	5	2	3	1	1	0	1	1	0	6	0	0	0	0	0	0
7	加世田市	32	10	0	6	3	2	1	8	2	4	3	1	3	2	7	3	0	4	3	0	0	0	1	0	0	0	0	4	0	1
8	枕崎市	23	1	1	3	5	0	2	2	1	1	5	2	1	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	1	2	0	2	0	0
9	指宿市	22	4	3	1	0	1	0	4	2	9	1	5	1	0	2	0	0	2	3	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0
10	国分市	30	7	0	4	3	1	1	3	5	6	4	1	0	0	1	2	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
11	垂水市	30	4	1	3	1	2	0	2	1	11	7	3	3	0	4	3	2	0	1	1	3	0	0	0	1	2	0	1	0	0
12	鹿屋市	18	6	1	2	2	1	0	1	0	8	1	2	2	1	2	0	0	0	8	4	1	2	0	1	2	1	1	5	0	0
13	西之表市	76	11	7	2	5	2	6	0	0	6	7	4	1	0	1	5	1	5	2	0	1	0	2	1	0	0	3	1	1	0
	計	462	83	35	53	43	25	26	45	24	92	54	36	15	4	47	31	10	22	44	18	18	10	8	23	15	12	4	39	3	6
1	知覧町	62	20	1	8	7	1	1	5	0	5	5	19	1	0	2	0	0	1	5	0	3	2	1	2	3	4	5	7	0	4
2	日吉町	23	3	0	4	1	0	0	4	4	2	1	4	0	2	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	3	0	0	2	1	0
3	姶良町	21	4	2	2	9	1	0	2	0	6	3	3	2	0	4	1	1	5	6	1	2	0	0	2	4	0	0	1	0	1
4	牧園町	27	3	2	5	7	3	0	5	2	2	10	1	2	0	1	1	0	0	5	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
5	末吉町	38	19	0	8	11	0	1	5	0	12	10	7	0	0	7	2	0	0	4	1	1	2	0	0	0	1	0	7	1	3
6	根占町	19	11	0	2	4	6	1	6	0	12	4	3	2	0	2	2	1	1	4	0	0	2	0	2	1	0	0	1	0	0
	計	190	60	5	29	39	11	3	27	6	39	33	37	7	2	17	6	2	7	25	5	6	8	1	6	11	5	5	18	2	8

18%
12%
9%
12%
12%
9%

小結　1　萩　ススキ　ツツジ　椿　手　つた　ま　松　大豆

ツツジ＝強

古代地形が多い ― 自然地形が多い
地形が陸い ― シラス地形
割こない言葉が多い

主部 ＝
1反の1/3

地名研究会報

第１９・２０号
昭和６３年６月５日
鹿児島地名研究会

Ⅰ．第１９回例会　昭和６３年１月１５日。国分市の城山・国分寺跡近辺・府中の巡検。

参加者：花園正志・浜崎盛雄・肥後芳尚・平田信芳・本田　潔・松浪由安・脇元東明（計７名）

この他に５名ほど、集合時間に若干おくれた方々があり、もう少し待てば良かったと反省しています。しかも雨の中、せっかくの機会に無駄足を踏ませたことを済まなく思います。今後、計画を練る場合、充分配慮します。

説明者：本田　潔（国分市文化財審議委員）・平田信芳

Ⅱ．巡検地の概要

城山山頂からの景観－－－－城山はその麓にある舞鶴城の「詰めの城」にあたり、古代以来天然の要害として「山城」に利用されて来た。城山山頂から眺めると、舞鶴城周辺の町並みの地割りと、町並み外縁部の地割りとが明らかに異なっている。町並み外縁部の田畑の地割りが「古代条里遺構」を示すものであり、Ｎ５°Ｅの方位は北極星を見通した方位すなわち真北に当り、古代においては正確に東西南北を意識した地割りであった。大隅国府跡と見られる「国分市府中」の地割りも真北方位にもとづいたものが若干残存している。なお京都セラミック工場敷地に小字「九ノ坪」、国分南中学校の敷地に小字「六ノ坪」の地名が残存している。これらは古代の条里遺構を追求する手掛かりとなる地名である。

金剛寺跡－－－－舞鶴城の東翼を鎮護する寺院。島津家16代「義久」の墓（関之坂石？）、真応上人入定窟などがある。国分郷「麓」の人々が建立した石碑・灯籠が多い。西南之役戦没者慰霊碑の前に並ぶ灯籠の中に「亀」の台・「雲と竜」の柱・「玉」の火舎、を形どった反田土石製の灯籠がある。これは明治14年、鹿児島の石工、西橋次右衛門が作ったもの。西橋姓の石工は島津家お抱えの石工だったとみられる。

大隅国分寺跡－－－－康治元年（1142）銘の現存六重の石造層塔（国指定文化財）がある。この石造層塔の石材の出所をようやくつきとめた。隼人町松永に「菅原天神磨崖仏」と呼ぶものがあるが、そこが古代の採石場で、正国寺石造層塔・四天王像（隼人塚）の石材も此処のものを用いたとみなされる。

遠寿寺墓地－－－－大隅国分寺跡北側の山裾にある。○に十の字の紋がつく墓は、島津義久夫人「一之台」のもの。遠寿寺墓地背後の「石山」は「遠寿寺石（おんじゅじいし）」と呼ばれた切石の採石場であった。国分市内で見られる石垣は、遠寿寺石を用いていた。

祓戸神社－－－－もともとは「守公神社」と呼ばれたもので、明治初年、祓戸（はらいど）神社と改名した。大隅国府の守護神で、この一帯が大隅国府の中心であった。祓戸神社の拝殿は十尺に十六尺の造り。これは奈良・平安時代に好んで用いられた「黄金比」すなわち１：1.618（近似値５：８）の技法を踏襲したものとみられる。境内入口の左手にある「不動明王像」（俗称、蛇の神さぁ）は、鹿児島県内の石像では最古の部類に属する。元禄５年、

小倉鹿之助作。桃木野石製。

気色の森－－－－府中集落の西端。嘆きの森・風の森などとともに、わが国最南端の歌枕。その立地条件は大隅国府の周辺であったこと。大隅国式内社・大隅国所在の歌枕などの位置を考えると、国府の所在地がどこであったかの答えは容易となる。

秋の来る気色の森の下風に
　立ちそうものはあわれなりけり
　　千載集：待賢門院堀川

音に聞く気色の森に来てみれば
　立ちそうものはあわれなりけり
　　山家集：西行法師

Ⅲ．第２０回例会　　昭和６３年２月２８日（日）　教職員互助組合会館小会議室

参加者：青柳俊二・池田信夫・江之口汎生・片岡八郎・唐鎌祐祥・郡山政雄・西薗一俊・浜崎盛雄・肥後芳尚・平田信芳・本田親虎・山口静也（計１２名）

甕藩名勝考読会：P.57～P.60

（問題となった地名および事項）

笠沙・笠狭（かささ）

平田　「重なる沙」と説明があるが、疑わしい。「笠」は形状を示す地名だろう。「サ」は平佐・帖佐・穆佐などの「佐」と同じで、場所を意味する地名語尾と考えておきたい。

加世田（かせだ）

平田　「かせだうち」という民俗行事が川辺地方に残っており、「稼いだ家」との解説がついて新聞に登場するが、加世田が「稼いだ」の転化とは考えにくい。「カセ」には形のあるものとして、糸を巻く「糸カセ」や、刑罰に用いた「手カセ・足カセ」などと呼ばれるものがあるが、これらが「田」と結びつくとは考えられない。鹿杖（かせづえ）・鹿柵（かせぎ）などと呼ばれるものがあったことから、鹿の古語のひとつに「かせ」があったと見られるが「鹿」と「田」の結び付きも稀薄である。

中世の文書に「悴畑（かせはた）」という記載があり「貧弱な自分の畑を指す場合に用いている」が「悴田」の語句は寡聞にして知らない。また、広辞苑に、「かせ」は海岸のこととある。海岸の意味だとすると、「浜田」と同類の地名となる。

「カセ」のつく地名を全国的に調べてみて、その立地を眺める必要がある。

竹屋（たかや）

平田　竹屋は「竹」に関係があるのだろうか。鷹屋ならば、「鷹」に関わるものと理解出来る。また高屋ならば、「高い家」の表現とも考えられる。ただし「高い家」の場合、高家（高江；たかえ）の表現があることを考慮しなければならない。

薩摩風土記

？　59ページに出て来る『薩摩風土記』とは。

平田　薩摩国風土記の逸文のことでは？

？　薩摩国風土記の逸文というのがありますか。

平田　中世の文献に引用されていたものがあったとは考えられませんか。

？　『薩摩風土記』は、薩摩国風土記とは別物のように思うけど。

平田　そういう考え方もありますね。後日の問題にしておきましょう。いずれ調べる必要がありますね。

Ⅳ．問題提起－－－－平田信芳

『国名郡郷と那珂郡』

国名郡郷とは大隅国大隅郡大隅郷・土佐国土佐郡土佐郷・安芸国安芸郡安芸郷・出雲国出雲郡出雲郷・丹後国丹波郡丹波郷（丹後国は丹波国から分立）・駿河国駿河郡駿河郷のように、国名と一致する郡および郷の名を指し、国名の由来となったその国の中心的な郡および郷であったと考えられる。

那珂郡・那賀郡は「中郡」を意味した地名である。和名抄の郷名に「賀美・那珂・賀茂」が多く見られ、これらは「上（かみ）・中（なか）・下（しも）」を意識した命名で、それを二字に表現したに過ぎない。那珂郡・那賀郡・中郡もその国の中心的な郡であったと考えられる。

「権力の発生」と「国名の成立」とは、当然同じ歴史の流れの中で眺めるべきものであり、国名郡郷や那珂郡などを中心に古代の勢力は成長したものと考えたい。平安時代にそれぞれの国の中心であった国府所在地と国名郡・那珂郡とを比較すると、和泉・出羽・能登・安芸が一致し、那賀郡は石見国に見られるだけである。しかし隣接のものを地図上で眺めると、伊賀・伊豆・安房・常陸・加賀・丹後・出雲・紀伊・阿波・讃岐・伊予・土佐・筑前・薩摩・壱岐と続出し、離れているのは駿河と武蔵だけである。ということは、国名郡郷・那珂郡などをもとに古代勢力を追求することも可能であることを示す。

鹿児島県には、その昔大隅郡・薩摩郡があった。大隅郡は消滅し、その境域についても種々の学説がある。しかし、大隅国造や大隅直の墓と考えられる古墳群の存在を考えると、その境域はおのずとしぼられて来る。

国名郡郷や那珂郡などの地名は古代勢力の発生を考察する素材となり得る。当然、豊かな水田地帯を支配し、周辺部には古墳群の散在が考えられる地域であるなど、種々の条件も目に付くことになろう。

『島廻（めぐり）という地名』

鹿児島湾奥に福山町がある。福山町に大廻・小廻（おおめぐり・こめぐり）と呼ぶ大字があり、一体何に由来するのかと興味があった。室町時代は廻氏が支配、戦国時代は島津氏と肝属氏が壮烈な廻城の争奪戦を繰り返した。島津義久の時代叔父島津忠将をはじめ多くの一族が戦死し、縁起が悪いとのことで福山に改名した経緯がある。

『鹿児島県地名大辞典』（角川）の小字一覧から地名を抽出する作業を何遍となく繰り返しているが島廻・島巡（しまめぐり）という地名が意外に多いことに気付いた。現在、各県ごとに「廻」地名の抽出を企図している。その作業は未完成であり、南九州に特徴的に見られるとしか言えないが、何か意味ありげな地名である。

「廻」ということで連想したのは、イザナギノミコトとイザナミノミコトが八尋殿の周囲を左右から廻る神話、鹿児島県に特徴的に見られる綱引行事で「竜神」にみたてた綱を引いて集落の周囲を一周する民俗行事、桜島大爆発以前に行われていた文字通り「島廻（しまめぐり）」という桜島一周の村落対抗の舟漕ぎ競争などである。

『鹿児島県地名大辞典』（角川）には、鎌倉時代から「しまめぐり」の地名が文書に見えることが記載されている。甑島に残る桂廻・桜ヶ廻・柳ヶ廻・巡田などの「廻」地名は、「めぐる」という行為に関係がありそうな感じを受ける。

祁答院町藺牟田には30例ほど「廻」地名があるがこれらの「～廻」は「～字」のような地名の用例とも見られる。「～の周囲」と言った意味あいの地名のようであり、現地で検討する必要を感じる。

なお「しままわし」「しままわり」などのルビは地名の意味が全然判らなくなっていることを示しており、その由来の古いことをうかがわせる。

次に、本来「島廻（しまめぐり）」と呼ばれていた地名が島廻（しままわり）・島廻（しままわし）と変化したのと同じようなことが大廻・七廻・皆廻という地名にも見られる。

大廻（おおめぐり）・大廻（おおまわり）・大廻（おおまがり）・大曲（おおまがり）の変化。

七廻（ななめぐり）・七回（ななまわり）・七曲（ななまがり）の変化。

皆廻（かいめぐり）・皆廻（かいまわり）・皆回（かいまわり）・貝曲（かいまがり）の変化。

ただし大曲（おおまがり）・七曲（ななまがり）の場合は、命名の動機が初めから「まがり」であったかも知れない。

「廻」地名は、この他に田廻・淵廻・家廻・葛廻・寺廻・宮廻などがある。また島根県に「廻」地名が多く見られるが、「廻（まわり）」と読む場合よりも「廻（さこ）」と読む例の方が多い。「廻（さこ）」という地形は、南九州の「迫（さこ）」と同じだろうと思うが、確かめてはいない。

京都府も、家廻・寺廻・宮廻・大廻・大曲・七曲などの地名が多く見られるが、京都府の場合は「まわり」と「まがり」の区別がはっきりしているようである。

「廻」地名の抽出作業は、まだ中途半端であり、結論めいたものを出せる段階ではないが、地名のもつ意味を考えると、面白い内容を秘めているようである。

（質疑応答・意見）

本田　入来にも「島廻（しまめぐり）」という地名がある。入来文書にも出て来る地名。入来が洩れている。

平田　そうですか。入来の場合は、見落しかも知れません。お気付きでしたら、お教えください。

肥後　国分市の場合は「ルビなし」とありますが野口も上井も「しまめぐり」と言います。「しまめぐり」という地名を聞いたことがあります。現地をはっきり知らないのですが、「島」のような地形の所ですか。

平田　上井の方は具体的には知りません。野口の方は水田が続いているだけで、これと言ったものに気付きません。あぁ、そうだ、水田の中に六地蔵塔が立っているのが、気になる所だけど。

江之口　思い付きだけど、「芝」が「島」に変化したのではないか。フーテンの寅さんの「芝又」を「島又」となまったりするから。「島廻」は「祀場廻り」と考えられないだろうか。

本田　田圃の中に島状に残った所が実際に見られる。それのまわりとか、それを回るというようなことではないのかな。

唐鎌　島状の地形。シラス地形に特徴的に見られるものとなれば、地形名としても面白そうですね。

肥後　大廻・小廻（おおめぐり・こめぐり）は、海岸線の円弧の大小と考えていたのだけど。大廻の海岸線が大きく、小廻の方が小さい。地形名としての検討も、必要ではないでしょうか。

平田　大廻・小廻は、全国的に見れば、まだ他にもあるようです。地図で当るなり、検討してみましょう。「めぐる」「まわる」という動きをその背景とする地名のようなニュアンスも感じます。

お詫び

国分城山巡検時は資料がいろいろ準備されましたが、この会報には本田潔先生提供のコピーだけを付けることにしました。また第２０回例会の記録は、ラジカセの故障で全然録音されていませんでした。そのため、質疑応答の箇所は印象に残っていることだけを適当にまとめました。発言の内容を聞き違えているかも知れません。

国名郡郷・那珂郡

国名	国名郡	国名郷	那賀郡	那珂郷	大国郷	中村郷	国府所在郡郷
山城					○	○	葛野郡？乙訓郡？
大和		大和郷		那珂郷		○	高市郡？
河内	河内郡				○		志紀郡
和泉	和泉郡	上泉郷					和泉郡 ◎
摂津							西成郡
伊賀	伊賀郡						阿拝郡印代郷
伊勢					兄国郷		鈴鹿郡
志摩							英虞郡
尾張					村国郷		中島郡
参河							宝飯郡
遠江							磐田郡
駿河	駿河郡	駿河郷					安倍郡
伊豆			那賀郡	那賀郷			田方郡
甲斐							八代郡
相模						○	大住郡
武蔵			那珂郡	那珂郷		○	多磨郡
安房	安房郡						平群郡
上総							市原郡
下総						○	葛飾郡
常陸			那賀郡	那珂郷		○	茨城郡
近江							栗太郡
美濃		美濃郷		那珂郷	村国郷		不破郡
飛騨							大野郡
信濃							筑摩郡
上野							群馬郡
下野							都賀郡
陸奥						仲村郷	宮城郡
出羽	出羽郡						出羽郡 ◎
若狭							遠敷郡
越前							丹生郡
加賀	加賀郡						能美郡
能登	能登郡						能登郡 ◎
越中							射水郡
越後							頸城郡
佐渡							雑太郡

国名	国名郡	国名郷	那賀郡	那珂郷	大国郷	中村郷	国府所在郡郷
丹波					山国郷		桑田郡
丹後	丹波郡	丹波郷					加佐郡
但馬							気多郡
因幡		稲羽郷					法美郡
伯耆							久米郡
出雲	出雲郡	出雲郷			山国郷		意宇郡
石見			那賀郡		大国郷		那賀郡 ※
隠岐							周吉郡
播磨				那珂郷	大国郷		飾磨郡
美作							苫東郡
備前							御野郡
備中							賀夜郡
備後					小国郷		葦田郡
安芸	安芸郡	安芸郷					安芸郡 ◎
周防		周防郷					佐波郡
長門							豊浦郡
紀伊			那賀郡	那賀郷			名草郡
淡路							三原郡
阿波	阿波郡		那賀郡				名東郡
讃岐			那珂郡				阿野郡
伊予	伊予郡			那賀郷			越智郡
土佐	土佐郡	土佐郷					長岡郡
筑前			那珂郡	那珂郷	大国郷		御笠郡
筑後							御井郡
豊前					山国郷		京都郡
豊後							大分郡
肥前							小城郡
肥後							益城郡
日向			那珂郡				児湯郡
大隅	大隅郡	大隅郷					桑原郡
薩摩	薩摩郡						高城郡
壱岐	壱岐郡						石田郡
対馬							下県郡

島廻（しまめぐり）

（1）しまめぐり

1　島廻(しまめぐり)　　鹿児島市田上
2　嶋廻(しまめぐり)　　鹿児島市武町
3　島巡(しまめぐり)　　大口市篠原
4　島廻(しまめぐり)　　姶良町豊留
5　島廻(しまめぐり)　　栗野町米永
6　島廻(しまめぐり)　　吉田町西佐多浦
7　島廻(しまめぐり)　　輝北町諏訪原
8　島巡　　加世田市地頭所
9　島巡　　菱刈町前目
10　島巡　　菱刈町徳辺
11　島巡り　　頴娃町牧之内
12　島巡　　頴娃町御領
13　島巡　　山川町大山
14　島巡　　山川町岡児ケ水
15　島巡　　松山町尾野見
16　嶋巡平　　松元町石谷

（2）しままわり

1　島回(しまわり)　　鹿児島市原良
2　島廻(しまわり)　　大隅町岩川
3　永山島廻(ながやましまわり)　　郡山町東俣

（3）しままわし

1　島廻(しまわし)　　鹿児島市岡之原
2　島廻(しまわし)　　鹿児島市川上

（4）ルビなし

1　島廻　　鹿児島市五ケ別府
2　島廻り　　出水市上鯖淵
3　島廻　　指宿市西方
4　島廻　　串木野市荒川
5　島廻　　国分市野口
6　嶋廻　　国分市上井
7　島廻　　横川町下ノ
8　島廻　　大根占町神川
9　島廻　　根占町山本
10　島廻　　中種子町野間
11　島廻　　祁答院町藺牟田
12　島廻り　　鶴田町鶴田
13　島廻り　　鶴田町神子
14　島廻り　　鶴田町紫尾
15　島廻　　樋脇町市比野
16　島廻　　志布志町帖
17　島廻り　　末吉町深川
18　島廻　　伊集院町竹之山
19　島廻　　伊集院町大田
20　島廻　　吹上町永吉
21　島廻　　吹上町和田
22　島廻　　松元町福山
23　島廻　　阿久根市脇本

（5）類似地名

1　嶋囲い　　宮之城町平川
2　島盛　　松元町福山
3　島迫(しまざこ)　　輝北町上百引
4　島移(しまうつり)　　輝北町下百引

（6）鹿児島県地名大辞典（角川）

しまめぐり　しまめくり〈松元町〉

鎌倉期に見える地名。薩摩国伊集院のうち。嘉元2年(1304) 5月23日の島廻味噌配分状に「しまめくりのミそ代の事　口々米肆升」と見え、当地に味噌代として4升の米が割当てられており、延慶 2年(1309) 6月20日の島廻味噌代配分状にも「しまめくりらの噌代（味噌代）の米はいふんの四升」と見える。現在の松元町石谷の島廻平、あるいは松元町福山の島廻とも思われるが未詳。

（7）祁答院町藺牟田の「廻」地名

久見ケ廻・深廻・管ケ廻・椎ケ廻・木山ケ廻・小森ケ廻・松ケ廻・西ノ廻・大石ケ廻・茶園ケ廻・頭ノ廻・大廻・太良ケ廻・湯ノ廻・長廻・葛ケ廻・堂ケ廻・池ノ廻・多津原廻・弓場ケ廻・重木廻・崎山廻・紺ケ廻・神楽ケ廻・中廻・島廻・入野廻・永廻・平山廻・大廻（30例）

（8）甑島の「廻」地名

1　桂廻　　上甑村江石
2　桜ケ廻　　里村里
3　柳ケ廻　　里村里
4　巡田　　下甑村手打

	島廻	大廻	七廻	皆廻	葛廻	淵廻	
滋賀							
京都	2	9	10	3	0	5	
三重							
和歌山	0	0	1	3	0	0	
奈良							
大坂							
兵庫							
岡山							
広島	0	1	1	0	0	0	
鳥取							
島根	0	1	0	0	0	0	家廻が4例
山口							
徳島	0	0	1	0	0	0	
高知	0	11	5	6	0	2	
香川	0	0	0	0	0	0	廻り田が2例
愛媛	1	4	4	6	0	2	
福岡							
佐賀	6	8	9	1	0	0	
長崎	2	9	17	1	0	1	
熊本	17	13	20	4	1	6	
大分	1	4	11	5	2	4	
宮崎	12	5	9	2	6	1	
鹿児島	48	26	30	2	6	18	
沖縄	0	0	0	0	0	0	廻原が6例

国府新城縄引帳写

右元禄十二卯年 二月十五日 検使永山 永山与右衛殿 牧仲左兵衛殿 縄引帳内写之
明治二十一年三月三日 国分村中市成氏
以本写畢候也

右国府新城古来より新城と申伝へ候、四方岩涯高サ三十二尋 又は二十三尋 高座(低?)あり、城内松山杉樹其外雑木、大木、竹山有之。

1 大手口
2 …但、道末に用水あり。…生竹(俗称しょちっ)、牛ケ迫(通称うっがさこ)
3 馬乗馬場 右十大間目 右 忍ケ尾小路
4 搦手の口 加きかけ口
5 猫の毛
6 茶臼ケ城 (ちょっがじょ)
7 清水隈辺の城 (清水城)
8 小陳(陣)(小字名小陣)此の所 二の丸の跡と申伝へ候 加きかけ(ママ)
9 かき掛 搦手の口。此所かき掛と申伝へ候、御門立候跡 鑰掛 清水城ではかんかけ
10 五社 (五社明神)
11 大平 (うひら うびや)

小字名による舞鶴城関連地名

大字上小川 (かみこがわ)
1 忍ノ尾 (忍ケ尾と関連)
2 新城 (隼人城 新城)
3 小陣
4 茶臼ケ城(ちょっがじょ)
5 城ノ下 (そのした)
6 大竹山 (うだっけま)
7 大平(うひら)
8 柏木(柏木の森)
9 南竜王
10 北竜王
11 中竜王
竜王(づお)
12 御内(おさと)

文政六年通帳と地名

文政六年癸未十一月 国分職所 ㊞
見分御士年寄助 服部休兵衛 御士年寄(7名)

㋐ 役所 城郭 練出等
1 仮屋角
2 御内(おさと みうっ)
3 桝形 11 弓場
4 鉄砲場
5 御門
6 犬追馬場(いけんばば)
7 鐘突(がねちっ)
8 搦手通 大手口
9 御菜園地
10 新城

㋑ 社寺
1 伊勢宮
2 金剛寺(こんごし)
3 仁王ノ下(仁王前)
4 稲荷宮
5 遠寿寺(おんずし)
6 若宮
7 龍王(宮)(づお)
8 観音堂
9 権現堂
10 洞雲軒(つおんけん)
11 四ツ足堂(よっさいどう)
12 久満崎
13 おがみ(拝)田
14 六地蔵
15 国分寺
16 常念寺
17 竜昌寺
18 恵美須角
19 正覚寺
20 阿弥陀堂

㋒ 居住者
1 岩切小路
2 野村〃
3 平田前〃
4 矢野角
5 山元小路
6 服部角
7 松下馬場
8 宮原角
9 南(楠)元出口
10 小野屋敷
11 鮫島城戸
12 浜田角
13 山崎角
14 外山

㋓ 町、商工業
1 後町 人形町
2 鍋屋小路
3 鍛冶屋(仮屋?)
4 本町(東
5 唐仁町

㋔ 方角、地形 他
1 東馬場 16なば
2 中馬場 17平原
3 西馬場 18砂走
4 池ノ馬場 19戸崎
5 竪馬場 20車田
6 四方田
7 浄水
8 東町(本町)
9 山元
10 宇都し
11 小道小路
○12 奥中村
○13 ぶた小路
14 迫田
15 筒の口

㋕ 通称名
でんぶ筋
納屋下
高麗町(古来とも)
道場下
川跡 くいま水戸
中町
西町)本町
塩屋町
門前(金剛寺の)
後馬場

新川掘り関係地名
工事、寛文2年～〃6年

松木
向川原
鶴園
鶴ノ前
松木川原
西前川原
南〃〃〃
前川原

福島
汐入
下古川
汐入川原
善左ヱ門池
上古川
中川原
広瀬川原
西中川原
下川添
上汐入
川添
江ゴノ口
水流
西古川
丸池
水流中

（国分郷土誌）
（大字小字名）

西古川尻
大鳥池
福瀬川原
水流中尻
川跡
二重水ヂ
曽小川
本川
下川原
新田
上汐入

広瀬
南塩入
後川原
川原
高岸
南高岸

湊
源ケ島
本船手
砂ケ町
新田
沖田森
入船

府中
下川跡
鶴ノ前
鶴ノ羽
中須（洲?）
大津
上大津
西古川
鶴ノ里
大津古川
野口川原
何安蛇水流
安蛇水流
丸池
上川跡

（湊）入舟
湊口
浜田
広瀬川原
荷揚
水ヂ口
西塩入
満汐
宝浜
竿留

上小川
砂ケ町
船着
龍川
中洲
上川跡
鶴籠
西川跡
鶴ノ前
島田
上川原
水流
榎川原
新田

向花（むけ）
中川原
川跡町
流合
西中島
中島
江ゴ
樅土手
下上川原
上川原
島森
下土器川原
土器川原
下川跡
下松木川原
松木川原
中島

野口
大津川原　野口川原
長春川原
下川原
島廻
江後
東川原
上川原
古川
向川原